



刊 大本 8巻8冊 寛文十年(1670) 吉野屋惣兵衛刊 志水文庫



2 平家物語 (巻九・巻十 刊 大本 2 冊 (全 11 冊、巻六欠) 宝永七年 (1710) 河内屋喜兵衛刊

志水文庫



刊 大本 1冊 貞享二年 (1685) うろこがた屋刊 菱川師宣画 奥書に「右此の武士道繪つくし珍敷にらるるを取集一帖にして令

版行者也」

3 古今武士道絵尽

4〔絵本よしつね〕 刊 半紙本 1冊 享保・元文頃刊か 書肆不明 題簽欠。一丁表から二丁表まで欠力。四丁ウラと五丁オモテの見 開きに「初音の鼓」が描かれている 子ども絵本



5 絵本義経嶋巡り 半紙本 1冊 下河辺拾水画 題簽欠 上巻のみ



初段 6 義経記 刊 半紙本 1冊井上大和少掾(播磨掾)正本 題簽角書きに「義経記/□□日」、中央に「伏見常磐」左に「大和 少掾」、下に「三条通/正本屋/喜□□□」 志水文庫

志水文庫



7 源氏烏帽子折 半紙本 1冊 菊屋七郎兵衛刊 山本角太夫正本

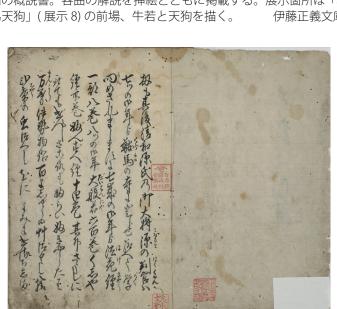
8 室町末期写下掛謡本「鞍馬天狗」

写 中本 1冊(全50冊) 本文の筆者(複数)・節付者は不明。「し ほる」など下掛り特有の用語も見られるが、下掛り表記「わき」 のほかに「シテ」という上掛りの表記も混在する。役の交代を示 す鉤印は節付後の後筆らしい。退紅色表紙。綴葉装。表紙の絵(草



9 謡曲画誌(うたいのえほん)

1冊 中村三近子(さんきんし)編著・橘守国画 享保二十年 (1735) 大坂 毛利田庄太郎刊(巻十刊記) 全 50 曲の謡 曲の概説書。各曲の解説を挿絵とともに掲載する。展示箇所は「鞍 馬天狗」(展示8)の前場、牛若と天狗を描く。 伊藤正義文庫



11 天狗の内裏

大本 1冊 文政5年(1822)写 裏表紙見返しに「文政五年 -月下旬写之/安藤彌五蔵」 蔵書印は「古志郡 福嶋村 安藤姓」 古志郡福嶋村は、現在の新潟県長岡市。各段は「扨も其後」で始まる。 語り物のテキストか。 志水文庫

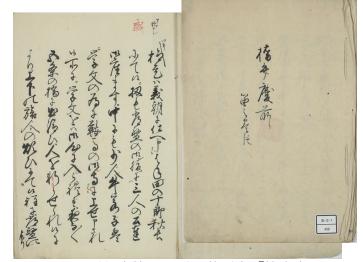


花、鳥、貝類)は曲の内容には無関係。

10 「鞍馬天狗牛若図」

写 1枚 絵師、制作年等不明 -部に薄く彩色が施 されているが、牛若 の姿には色がない。 代わりに、細かく色 の指定が書かれてい る。定型化している 鞍馬天狗と牛若の図 の絵手本か。

志水文庫



12 須田氏伝来等野口氏旧蔵謡本「笛之巻」 半紙本 一冊 「笛之巻」はもともと「橋弁慶」前場の替だが、 独立曲として扱われるようになったもの。本資料は京観世五軒家 の岩井七郎右衛門の高弟であった須田文蔵只晟(宝暦・明和期 (1751~71)) の弟子であった野口宗明の旧蔵本。

須田家伝来等野口氏旧蔵資料

志水文庫



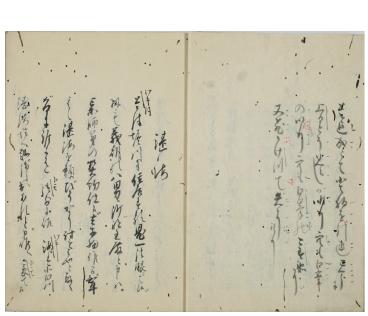
13 平家女護島

刊 半紙本 1 冊七行本 玉水源治郎ほか刊 近松門左衛門作享保四年 (1820) 竹本座初演の浄瑠璃の正本の後刷本

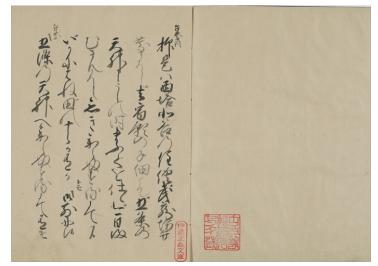


15 鬼一法眼三略巻 橋弁慶

刊 半紙本 1 冊 五行稽古本 明治四十三年 竹中清助刊 表紙に「橋弁慶 相生太夫」と墨書 本文には、朱譜の書入、書 込がある 四世竹本相生太夫旧蔵資料



17 江崎家旧蔵十番綴謡本





14 近世初期写 上掛節付二番綴謡 本橋弁慶・羅生門 写 中本 1冊 室町 末期頃節付、本文は観 世元頼系統か。紺色と 象牙色の二種類の表紙 の二番綴謡本47 冊と、 別に「曲舞の拍子合」 1 冊とから成る。

伊藤正義文庫



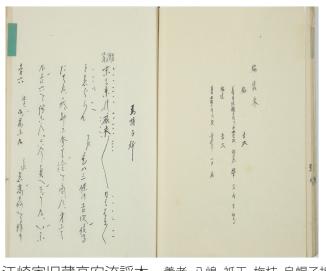


18 遊屋物語付タリ牛若兵法之恋慕

刊 半紙本 1 冊 延宝四年 (1676) 正本屋九兵衛(山本九兵衛) 十七行絵入本 宇治加賀掾正本 展示しているのは、稲荷の社の 場面。押し寄せてきた湛海らに対し、跳び上がって敵を真っ向割 する牛若と鎧を着けて長刀を構える桂の前。 阪口弘之氏蔵

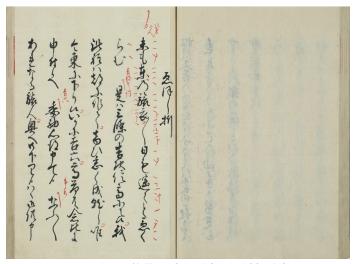


19「鬼一法眼三略巻」絵番付 刊 1枚 享保十六年 (1731) 初演の浄瑠璃の絵番付いつの上演のものかは不明。本来の番付に書かれているはずの役割等はなく、初段から五段目までの場面が並ぶ。 志水文庫



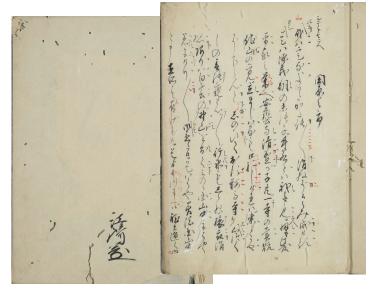
21 江崎家旧蔵高安流謡本 養老・八嶋・祇王・梅枝・烏帽子折写 半紙本 1冊 五番綴本 42 冊の計 210 曲に「翁」を添えた揃本。各曲の冒頭に「脇装束」を付す。山口一男筆。高安流は流儀の謡本が公刊されておらず、貴重な資料である。

江崎家旧蔵資料



23 江戸後期写福王流系番外謡本 養松尾・治親・水無瀬・生贄・泰山府君・鼓瀧・烏帽子折・ 陀羅尼落葉・菊慈童・厳島

写 半紙本 1冊 本文は観世流。役名・節付などが朱筆で書き入れられている。



20 江崎家旧蔵上掛三番綴謡本 明静・恋重荷・関原与市

写 半紙本 1冊

江崎家旧蔵資料



刊 大本 1 冊 八行本 竹本義太夫正本 献上本 近松門左衛門作 初丁半丁分欠。半紙本を印刷するための版木を使って、大

初丁半丁分欠。半紙本を印刷するための版木を使って、大本用の 髪に印刷した本。こうした本を献上本と呼ぶ。 志水文庫



24 江崎家旧蔵上掛十番綴謡本明初雪·松浦梅·星·帰鳫·村山·宮川·浦嶋·内府·現在熊坂·濡衣写半紙本 1 冊 江崎家旧蔵資料



半紙本 1冊 山本六兵衛刊 近松門左衛門作 十行本 竹本義太夫正本 志水文庫



26 十二だんさうし 大本 1冊 奥書に「慶安五年書之」 浄瑠璃御前物語の「笛の段」から「御座移り」までを書写した本 志水文庫



27 十二段 半紙本 1 冊 近松門左衛門作 八行本 竹本義太夫正本 展示しているのは、「長生殿四き」の節事部分

# 28 浄瑠璃御前七度使い

鳥居清長 大判錦絵 3 枚続 西村屋与八版 牛若丸が館の外で 吹く笛の音を聞い た浄瑠璃御前は、 侍女に笛の主を呼 びに行かせる。左 端に笛を吹く牛若 丸、右端座敷に立 つのが浄瑠璃姫。 間にいるのが、牛 若丸を呼び入れる ために浄瑠璃姫が 使わした侍女た ち。牛若丸以外の 姿は当世風となっ ている。





29 牛若丸浄瑠璃姫之御殿忍図



3 枚続 明治二十 年 (1887) 菅谷 与吉刊 手燭を持つ侍女に 伴われた御曹司と 館の縁先に出て御 曹司を待つ浄瑠璃 姫の姿が描かれて いる。振り返る御 曹司の視線の先に は、月明かりに照 らされた泉水が広 がっている。揚州 周延は幕末から明 治・大正に活躍し た浮世絵師。 水文庫



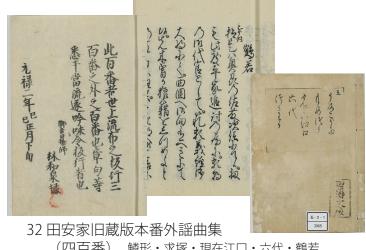
30 浄瑠璃十二段草子 写刊 葛飾北斎錦絵 1枚 享和年間刊 版元不明

志水文庫



31 笛の段 刊 一勇斎国芳錦絵 1枚

改印は「普」。改印か ら弘化 (1844~) 頃の 出版かと考えられる。 門の外で笛を吹く御 曹司と、奥の館から 手燭をかざして来る 侍女の姿が描かれて いる。もとは、右に 浄瑠璃御前の姿が描 かれた二枚あるいは 三枚続きの可能性も ある。 志水文庫



(四百番) 鱗形・求塚・現在江口・六代・鶴若

刊 小本 1冊 元禄二年 (1689) 林和泉掾刊

五番綴全20冊。貞享三年の三百番本(展示36)に続いて刊行され、 後の五百番本(展示 46)もあわせて番外曲では唯一刊行された揃 本となった。当時の将軍綱吉・次代家宣の稀曲好みが謡本に反映し たと言わる。節付方やその精粗が曲によって異なる。志水文庫



33 江戸期写上掛五百番謡本 剱珠・二度掛・野寺・住吉詣・五筆

半紙本 1 ∰ 本文はほぼ観世流と同じ。展示35と同じ揃本の一冊。 吉田文庫



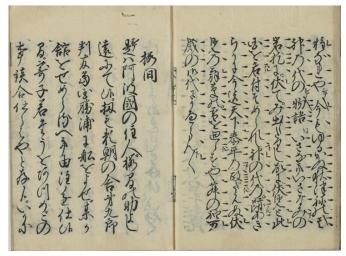
34 寛文十年恵賢刊観世流謡本 白楽天・八島・井筒・桜川・錦木

1冊(全19冊、第1冊欠) 寛文十年恵賢版の初刷。 各巻末に服部宗碩の署名と「流木軒盛信」の朱印があり、服部宗碩 こと福王流七世盛信 (宗碩は隠居名)の手沢本。本文中に朱筆で章 句語句等の訂正挿入等が施されている。 伊藤正義文庫



35 江戸期写上掛五百番謡本 融通鞍馬・秀次・家持・盲沙汰・熊手判官

1 ∰ 半紙本 本文はほぼ観世流と同じ。展示33と同じ揃本の一冊。 吉田文庫



36 田安家旧蔵版本番外謡曲集(三百番) 伏見・桜間・女沙汰・隠岐院・和田酒盛

刊 小本 1冊 貞享三年 (1686) 林和泉掾刊 五番綴 全 20 冊 の番外謡本。内百番・外百番の計二百番の定番曲に続く番外の百 番として刊行され、後に四百番(展示32)・五百番本(展示45)も出た。 節付方やその精粗が曲によって異なる。 志水文庫



37 平松家旧蔵福王流番外謡曲八百十番本 剱山住・厚婦・宮猩々・江島童子・遠矢・春日野之露・現在善知鳥・ 西岸居士·堯舜·嵯峨女郎花

# 半紙本 1冊

『福氏門人録』にも名前の見える、享保以来の福王家の高弟平松善 右衛門の所持していた全810番の謡本。福王流は当時から謡指南 も幅広く手がけており、謡の番外曲を多く伝えている。

伊藤正義文庫(平松家関係資料)



38 舞「八島」

半紙本1冊 裏表紙見返しに「奥州の里…」「勢州渡會之郡\*良村」の書込あり



39 義経記 三之巻 刊 半紙本 1冊 うろこかたや刊 六段本 十七行絵入本 土佐少掾正本 志水文庫



40 門出八島 半紙本 1冊 鶴屋喜右衛門刊 十行本 山本角太夫正本



41 一谷嫩軍記

半紙本 1冊 西澤九左衛門、鱗形屋孫兵衛刊 浅田一鳥、浪岡鯨児、並木正三、難波三蔵、豊竹甚六、並木宗輔 豊竹越前少掾正本 七行本 志水文庫



42 義経腰越状 刊 半紙本 1冊 萬屋仁右衛門、吉文字屋次郎兵衛刊 豊竹越前少掾正本 七行本 神戸女子大学図書館 森修文庫





43 腰越状(『今川了俊對愚息』所収) 刊 大本 1 冊 菊屋七左衛門刊 「腰越状」、「初登山手習教訓書」、「義經含状」、「熊谷状」、「經盛返状」、「弁慶状」、「曽我状」 志水文庫



刊 半紙本 1 冊 山本九右衛門、山本九兵衛刊 文耕堂、三好松洛作 七行本 神戸女子大学図書館 森修文庫

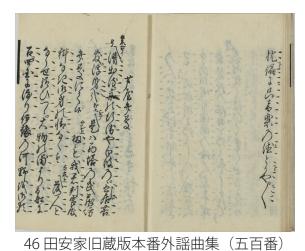


47 江戸初期写観世流謡本「船弁慶」 写 半紙本 1冊(全98冊) 本文筆者(数筆か)、節付者とも不明。本文は基本的に上掛りの古版本の範囲で、施譜は観世大夫黒雪風。装幀は紺無地表紙の半紙本で、全体的に石田友雪本が想起される雰囲気を持つ。元和卯月本に含まれない15曲すべてに朱の書入れがあり、何らかの係わりをうかがわせる。



44 文化九年福王茂十郎写「正尊」 写 大本 1冊 文化九年(1812)正月 福王盛充筆 福王盛翁(盛充)から平松善右衛門へ伝授された謡本(奥書)。平 松は八百十番の揃本(展示 37)を所持していた高弟。《正尊》はワ キ方の祖・観世弥次郎長俊の作ゆえワキ方秘事と記す。

伊藤正義文庫(平松家関係資料)



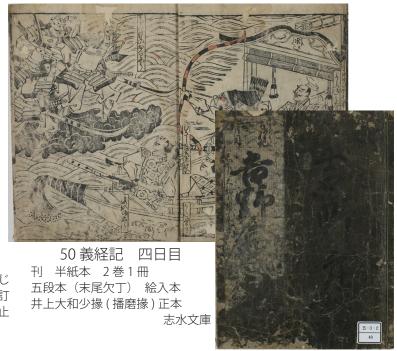
上宮太子・芦屋弁慶・恋草・餓鬼・出雲龍神刊 小本 1冊 正徳六年 (1716) 林和泉掾刊 五番綴全 20 冊の番外謡本。三百番 (展示 36)、四百番 (展示 32) に続いて元禄十一年 (1698) に田方屋伊右衛門が刊行、林和泉掾が改めて刊行した。先行の書に比べて特に下掛り系節付けが多く三分の一に及ぶ。 志水文庫



48 義経千本桜 刊 半紙本 1 冊 竹田出雲・三好松洛・並木千柳作 美濃屋平兵衛刊 七行本 志水文庫



49 明和改正謡本外組 橋弁慶・忠信・烏帽子折・正尊・大仏供養 刊 半紙本 1冊 明和二年 (1765) 六月 出雲寺和泉掾刊 十五世観世大夫元章による改訂謡本。各種の装幀があるが、総じて美麗。全二百十番は独特の選定で、ほとんどの曲の文句を改訂し詳細な直しを加えた。この改訂は不評で、元章没後すぐに廃止された。 伊藤正義文庫







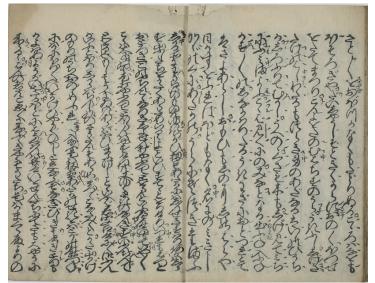
52 吉野忠信 刊 半紙本 1 冊 山本九右衛門、山本九兵衛刊 近松門左衛門作 十行本

志水文庫



53 万治二年刊観世流頭注入謡本 刊三輪・安宅・東北・錦木・雲林院 刊 大本 1冊 万治二年(1659) 山本長兵衛刊 上部に字句の注釈を、下部に御家流書体の本文を掲げる新形式の 謡本。頭注入り・本文8行の構成も以後に例がない。山長は本書 を初めて刊行した後、江戸末期まで観世流謡本刊行の中心的役割 を担った。 伊藤正義文庫





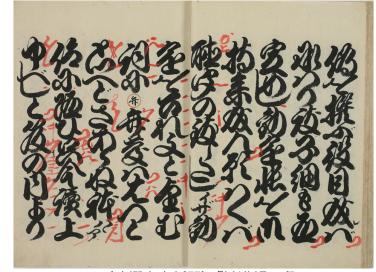
55 凱陣八島

刊 半紙本 1冊 鶴屋喜右衛門刊 井原西鶴作 十行本 内題下には「近松門左衛門」とあるが、実際の作者は井原西鶴 というのが現在の見解である。 神戸女子大学図書館 森修文庫



57 進藤流謡本 摂待・三輪・龍田・東岸居士・自然居士刊 中本 1冊(全20冊) 木田七兵衛刊 寛永期に刊行されたらしい進藤流の謡本で、独自の組合わせを持つ新出本。進藤流は、観世座付きのワキ方で、寛永十二年(1635)に83歳で没した進藤久右衛門忠次を流祖とする。進藤流の謡本は、江戸初期には観世流に次いで数多く刊行された。

伊藤正義文庫



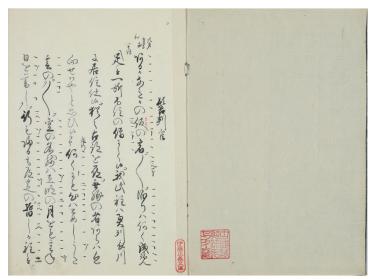
56 [鳴響安宅新関] 「勧進帳の段」

刊写 特大本 1冊 四世竹本相生太夫旧蔵の床本

床本は、浄瑠璃の太夫が実際に語るときに使う本のこと。大形の 書型で、半丁に五行の大字で本文を書き、横に節を付したのが床 本の形である。 四世竹本相生太夫旧蔵資料



58 凱陣八島 刊 半紙本 1 冊 鶴屋喜右衛門刊 井原西鶴作 十行本 志水文庫



59 平松家旧蔵福王流番外謡曲八百十番本 髻判官·禿物狂·大川下·将門·辛崎·九十/賀·慈覚大師·伊呂波· 三社託宣·武蔵塚

写 半紙本 1冊

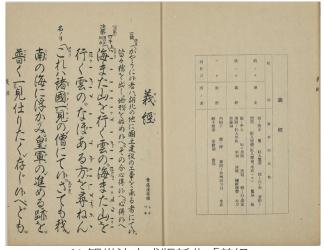
伊藤正義文庫(平松家関係資料)



60 江崎家旧蔵二番綴謡本 摂籠祇王・野口判官

写写 半紙本 1冊

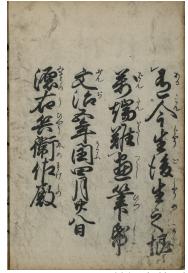
江崎家旧蔵資料



61 観世流大成版新曲「義経」

刊 半紙本 1冊 高浜虚子作 観世銕之丞節付昭和十七年 (1942) 檜書店刊

第二次世界大戦中に士気高揚のために作られてラジオで放送され、『観世』(昭和 17 年 3 月号)に詞章掲載後、出版された稽古用の謡本。 伊藤正義文庫





62 義経含状(〔古状揃〕所収

刊 大本 1 冊 延宝 8 年 (1680) 松会刊 「大坂状」「義経含状」「西塔之武蔵坊弁慶最後書捨之一通」、「熊谷 送状」、「経盛返状」、「初登山手習教訓書」 志水文庫



# 63 能狂言画帖 写 大本 折本 1冊 明治四十一年(1908)一月 能と狂言を交互に描く。所収曲 は「三番叟・老松・靫猿・船弁 慶・仏師・道成寺・秀句傘・松 風・鎌腹・安宅・空腕・俊寛・ 武悪・望月・米一・弱法師・伯 母酒・箙・貰聟」。

吉田文庫



64 青山仮皇居御能図

刊 大判錦絵 3 枚続 揚洲周延画 明治十一年(1878)浅草綱島亀吉刊 明治十一年七月五日に青山大宮御所能舞台で催された舞台披き能を描いた錦絵で、能の4番目に演じられた《正尊》の舞台の様子。義経の姿はないが、起請文を読み終えた正尊を、静が今様を謡い舞を舞ってもてなす場面。 伊藤正義文庫

青山大宮御所の能舞台は、能楽愛好者であった英照皇太后のために新設され、舞台披き当日は、《翁》を皮切りに能5番・狂言4番が交互に上演された。シテを勤めた観世流の初世梅若は、シテ方宝生流十六世宗家の宝生九郎、金春流シテ方の桜間伴馬とともに明治の三名人とうたわれるほどの実力者であり、青山大宮御所に能舞台が設けられた際には御能御用達の一人に任命された。当時は、明治維新の打撃により衰退の危機を迎えていた能楽界が、政府の保護策や皇室・旧大名の後援などにより、徐々に復活へ向けて歩み始めていた時期であり、青山大宮御所における能舞台の造営も、能楽復興に大きく貢献したとされる。絵の中央で顔を後ろに向けて座る男性は明治天皇。



65 浄瑠璃御前物語断簡 八枚の内「忍びの段」

写 八枚(元は草紙か) 近世ごく初期成立と考えられる奈良絵本の断簡 8 枚の内の 4 枚。奈良絵本らしく華やかに彩色された「泉水揃え」の場面や「忍び」場面などが残る。本文は、奈良絵本系の本文。8 枚はれんぞくしたものではない。展示しているのは、①は泉水揃え、②は草子の段、③笛の段、④は忍びの段の部分である。

上図、右端が牛若、左上が浄瑠璃御前 志水文庫

あいどる

# 企画展 みんなの偶像!牛若・義経 一芸能にみるその姿—

Δ

古典芸能研究センターでは、源義経の生誕八百六十年、没後八百三十年ということで、九月二十七日から全五回の特別講座「アイドル・義経の形成を探る」を開講している。これに合わせてここでは、牛若・義経が登場する能や浄瑠璃の資料を展示する。能には、「鞍馬天狗」「橋弁慶」「烏帽子折」「八島」「船弁慶」「安宅」など牛若・義経が登場する曲と、「熊坂」「二人静」など牛若・義経の周辺の人々を取り上げた曲がある。浄瑠璃と義経ならば、「義経千本桜」「義経腰越状」など題名に〈義経〉の名が入る曲が思い浮かぶであろう。古浄瑠璃には牛若が活躍する曲が少なからずある。こうした能・浄瑠璃において、牛若・義経はどの様な物語の中に登場し、どのような立ち位置で、またどのような姿で描かれているのか、義経の生涯に添いながら見ていきたい。(川)

※義経の成人以前の名前は牛若、遮那王、あるいは御曹司、成人以後の名前も義経、判官など作品によって異なる。展示の解説では、基本的には成人前は「牛若」、成人後は「義経」で統一し、必要に応じて他の名前を並記する。

※展示・解説はセンター非常勤研究員の大山範子と川端咲子が担当した。それぞれの担当した解説には、 文末に(大)(川)と記している。

# 【牛若・義経の姿】

義経がどの様な容姿であったのか。『平家物語』巻第十一で越中次郎兵衛(平家方の武将)が「九郎は色しろう、せいちいさきが、むかばのことにさし出でて、しるかんなるぞ。」と色白、小柄、反っ歯だと述べているのは有名である。現実の義経の姿がどうであったかはともかく、物語や伝説の中での義経は可憐な稚児、優美な武将として描かれるようになる。『義経記』では鞍馬山にのぼった牛若を「こ、ろ様眉目形類なくおはしければ」と述べ、鏡の宿では襲ってきた強盗は牛若を見て「いつくしきとも斜ならず」「きはめて色白く鐵漿黒に眉細くつくりて(中略)傾城と心得て」と女性と思って油断する。室町時代に成立した『浄瑠璃御前物語』では、牛若の姿を垣間見た侍女が主人の浄瑠璃御前にその姿を「年を申さば十四か十五と打見えて、佇み給ふ有様を物によくよく譬ふれば、昨日か今日の山出の稚児姿と打見えて 目の中の気高さはいかさま百万騎がその中の 大将とは申ともこれにはいかで勝るべし」と報告する。現在、能の「八島」の後ジテ(義経の幽霊)で使われる面は「平太」、文楽で義経の役に使われる首は「源太」である。文楽の首の「源太」は、色男の役に使う首である。ここでは、展示資料のなかに描かれている義経の姿を並べてみる。(川)

# ○能の絵入り本について

能の物語を絵画とともに鑑賞するという現象は、室町後期頃から流行した御伽草子(おとぎぞうし)や幸若舞曲(こうわかぶきょく)などの文芸作品の絵入り本化の一環として広まったとされる。能の絵入り本や絵巻は16世紀末頃から現れ始め、その殆どは謡曲の詞章そのままの詞書(ことばがき)と鮮やかな彩色が施された挿絵の組合せから成る。いわゆる奈良絵風の物語絵を収めた、それらの能の絵本・絵巻は稀少で、国内・海外をあわせてこれまでに約20点の伝存が知られているにすぎない。能の絵入り本・絵巻は室町末期頃から江戸前期頃まで作られたが、江戸中期以降は次第に姿を消していった。

ちなみに奈良絵とは、室町後期頃から江戸前期頃にかけて描かれた絵入り彩色写本(奈良絵本)の挿絵をいう。これは明治以降の呼称で、なぜ「奈良」がつくのかはわかっていない。(大)

#### ○古典芸能研究センター歳〔絵入謠本〕

紺色紙に金砂子切箔散し金泥霞引草木模様入表紙。左肩に曲名を墨書した題簽貼付、観世流の詞書(詞章)が鳥の子紙に原則片面7行で書かれる。書体は全帖一筆とみられ、題簽も同筆である。本文の右方に役名表記があり、「詞・カ、ル・ーセイ・サシ・上歌・ロンギ・クセ・ワカ・キリ」および「上・中・下」などの節付け記号が付されるが、ゴマ点はない。木箱の蓋裏に「大正十三甲子七月十日/前田家於本郷邸内御払道具ノ/節求之」の墨書があり、もとは前田侯爵家旧蔵だったものが大正十三年(1924)に売り立てられたことが知られる。各帖に、いわゆる奈良絵風の彩色絵による挿絵4図(「橋弁慶」のみ3図)が施されていたとみられる。(部分的に11箇所の絵が抜かれている。) 1帖1曲を収め、全12曲。

奈良絵本に分類される能の絵本・絵巻のうち、本書と同じく元は揃本だったと推測される豪華本は特に希少で、東洋文庫(岩崎文庫)蔵「観世流謡本 絵入六番」6冊を含め、3種類程度しか知られていない。これらの絵入謡本の成立時期は江戸前期頃と考えられており、本書も概ねこの頃に制作されたと推測される。本書の挿絵は、能のストーリーを絵画化した物語絵をベースにしながらも、所々に実際の能の演出を反映させた描写を組み合わせるという、一見アンバランスな構成である。こうした手法は、舞台のエッセンスを取り込みつつ、能の物語を視覚的に把握できる読み物を作るための工夫らしい。(大)

# ○絵入稿本「橋弁慶」(→梗概などはE参照。資料14も「橋弁慶」謡本。)

「橋弁慶」は本来は全3図の挿絵があったらしいが1枚が抜かれており現状は2図。第1図(3丁裏)は、 (第一図)

今日も丑の刻詣でに出かけようとする弁慶を、従 者が「十二、三歳の怪しい者が五条の橋に出て人 を斬ってまわるとの噂を聞いた、と外出を止める 場面。パネルで展示した第2図(6丁表)は、五 条の橋で牛若丸と弁慶が出会う場面。挿絵の弁慶 は七つ道具を担ぐ鎧姿であるが、能の後場の弁慶 の扮装は、袈裟(けさ)頭巾(ずきん)・法被(はっぴ) (水衣を重ねる場合も)・半切(はんぎり)という 僧の出立に長刀を持っており、この挿絵とはかな り異なる。顔が色黒いのは、色黒の大男という弁 慶像が室町時代には定着していたためで、他の奈 良絵本の中でも弁慶は色黒に描かれている。また、 五条橋で対決する牛若丸が、高足駄(たかあしだ) を履いた色白の稚児姿に描かれるのも定番であ る。挿絵の牛若が能では用いない高足駄を履いて いることからも、絵師は、『〔絵入謡本〕』の制作 当時に世間に流布していた弁慶と牛若丸の一騎打 ちのイメージをもとに、この場面を描いたとみら れる。なお、この挿絵は、後場の詞書(能の詞章) に、弁慶が鎧姿で五条の橋に出かけると記されて いることにも一致する。(大)



江戸時代に入ると、1図に1曲の上演場面を描いた能・狂言絵が現れ始める。原則として能・狂言を演じる立チ方(たちかた)の役者のみが緻密に描かれ、能舞台などの背景は作り物をのぞき一切描かれない。これらの絵は、絵巻、画帖、貼交(はりまぜ) 屏風など、さまざまな体裁で伝わっており、多くの場合、能絵と狂言絵を交互に並べて収める(能絵のみ、狂言絵のみのものもあり)。能・狂言の舞台の見せ場を描くこうした絵画形式は、江戸

(第三区)



時代に一つのスタイルとして定着し、数多くの作品が制作された。

また、これら演能図とも称すべき能・狂言絵の多くが特定の「粉本(ふんぽん)」をもとに制作され、特に江戸前期の作品によく似た構図の絵が多いことが知られている。粉本による伝統的な手法で制作されることの多かった演能図も、江戸中期以降になると、絵師独自の図様によって描かれた能・狂言絵も作られるようになった。(大)

(神戸女子大学古典芸能研究センター研究資料集2 『絵入謡本と能狂言絵』所収、小林健二氏「解題」参照。)



# ○[福王雪岑 能狂言画巻] より「烏帽子折」

(→梗概などは日参照。)

ワキ方福王流九世茂右衛門盛勝(画号:雪岑、元禄十四年 〜天明五年(1701〜1785))の手になる、能「烏帽子折」の絵。 曲の終盤、牛若(子方)が盗賊の熊坂長範(後シテ)と対決 する場面を描く。

本画巻は、能と狂言の彩色絵 18 図が交互に描かれており、 絵巻の末尾に「雪岑筆(朱印)」の落款がある。全 6 紙。各 絵図の左上に、すべて一筆で曲名が墨書されている。冒頭の 「千歳」に始まり、10 曲の能絵と 7 曲の狂言絵を収め、能絵 は五番立の曲順に基づいて描かれている。最後に「呉服」を 置くのは祝言能として扱ったためであろう。上品かつ細緻な 筆致で、各曲の見せ場が描かれている。絵師自身が能役者で あるため、同時代の舞台をかなり正確に映していると思われ る。所収曲は順に「千歳・白楽天・鼻取相撲・俊成忠則・茸・ 松風・歌仙・道成寺 金春流・餌差十王・富士太鼓・花子・羅生門・ 昆布売・三輪・宗八・烏帽子折・絃上・呉服」。(大)

# 【『平家物語』や『義経記』の義経】

# ○『平家物語』について

広く流布した一方流の語り本系統で概略を示すと、天承元年(1131)に清盛の父忠盛が昇殿を許されたときのエピソードを描いた「殿上闇討」に始まり、建久十年(1199)に清盛の曽孫六代が逗子の田越河畔で処刑されて平家の子孫が絶滅するという終章の「六代被斬」まで、五世代(忠盛—清盛—重盛—維盛—六代)約70年間に及ぶ平家一門の興亡がその対象である。もっとも集中的に語られているのは、仁安二年(1167)に清盛が50歳で太政大臣に昇進し栄華の絶頂を極めてから、寿永四年(1185)に平家一門が壇ノ浦で滅亡するまでで、その運命の変転の目覚ましさを描き出すことが物語の大きな眼目となっている。

義経は、木曾義仲追討のための上洛時に名が記されて(巻八「法性寺合戦」)、宇治川合戦の後に登場する(巻九「河原合戦」)。そして木曾義仲を討ち、源平の戦いにおいて、一ノ谷・屋島・壇ノ浦とその活躍のさまが語られている。しかし、頼朝との不和が表面化して都落ちを余儀なくされた以後の消息は、「大物の浦より船に乗って下られけるが、折節西の風はげしく吹き、住吉の浦にうちあげられて、吉野の奥にぞこもりける。吉野法師に攻められて、奈良へ落つ。奈良法師に攻められて、又都へ帰り入、北国にかかって、終に奥へぞ下られける。」と、大物浦からの船出( $\rightarrow$ N)、吉野行き( $\rightarrow$ O)、奥州への道のり( $\rightarrow$ P·Q)がごく簡単に記されるのみである。『義経記』が、義経の成人までの前半生と都落ち以降の後半生を詳しく描くのに対し、『平家物語』は武将として華々しく活躍した時期を描く。両書は、言うなれば相補う関係である。(大)

# ○「平家」あるいは義経伝承説話と能

能との関係について言えば、『平家物語』ほど多くの題材を能に提供した文学作品は他にないだろう。しかし、牛若·義経関係の作品に限って言えば、『平家物語』を直接の典拠とする能は決して多くはない。つまり、能においては『平家物語』で描かれるような義経―平家追討のために戦う勇将として描かれる―は少なく、先述のようなさまざまな牛若・義経像が見られるのである。

義経とその周辺の人物を主人公にした曲は、能作品の一分野を占めている。それらは、「鞍馬天狗」「橋弁慶」「烏帽子折」「熊坂」のように少年時代の牛若の登場する曲、「船弁慶」「安宅」「摂待」あるいは「正尊」「錦戸」など義経一行の逃避行を扱った曲、「吉野静」「安達静」「二人静」など義経と別れた後の静の物語を描いた曲、「忠信」「鈴木」「清重」など義経の郎等をシテ(=主人公)とする曲に大別することができる。

ただ、それらはいずれも『義経記』(義経物語)との直接の出典関係は認めがたく、「義経関係伝承」とでもいうべきものに拠っている。また、多くの曲で幸若舞との内容的関連が指摘されている。そのほか室町物語類などを含めた室町時代の広範な義経伝承の中において、これらの曲の形成は考えねばならないだろう。 (大)

#### ○版本『義経記』(展示1)

室町時代に成立した『義経記』は、八巻からなり、その内容は題名が示すとおり源義経の一代記である。 巻四までは前半生、巻五からは後半生が描かれている。各巻の内容は以下の通りである。

巻一:平治の乱に敗北した義朝(義経の父)の敗走から始まり、鞍馬山に預けられていた牛若(遮那王)が奥州藤原氏を頼るべく鞍馬山を下るまで

巻二:鏡の宿での強盗退治、熱田での元服、兄の阿濃禅師との対面を経て、奥州に到着し藤原秀衡との対面までと、その後再び密かに上洛して鬼一法眼から秘伝を学び取るまで

巻三:終生の家来となる武蔵坊弁慶の物語から始まり、義経と弁慶の邂逅と君臣の契約を結ぶまでが書かれ、頼朝(義経の兄)謀反を知り奥州を出立するまで

巻四:駿河国浮島が原で頼朝と対面から源平の合戦を経て、兄弟不和となり都落ちした義経が大物の浦 から吉野山へ向かうまで

巻五:吉野山での静御前との別れ、佐藤忠信を残し吉野山を落ちるまでと吉野山での忠信の奮戦のさま 巻六:吉野から都へ上った忠信の死、鎌倉へ下った静御前の物語

巻七:弁慶以下十六人の家来と共に北国落ちする義経の物語。各所で起きた危機を脱した後、亀割山で 北の方が出産、その後奥州に到着して藤原秀衡と対面するまで

巻八:秀衡の死により庇護を失った義経主従は、秀衡の後を継いだ泰衡らに攻められる。衣川の高館で 奮戦後、弁慶は壮絶な立ち往生を遂げ、義経は北の方と共に自害する

義経の絶頂期である源平の合戦については、巻四で僅かに語られるのみであり、前半生・後半生の不遇な時代が細かく記されることにより、悲劇的な生涯を送った"源義経"というイメージが強調されている。『義経記』には『判官物語』系·流布本系·版本の三つの系統がある。その内の版本には、古活字本と整版がある。整版は寛文十二年刊の丹緑絵入本以下十種ほどある。古典芸能研究センター所蔵の『義経記』は、寛文十年吉野屋惣兵衛刊の八巻揃いと刊年不明巻二のみの二種類でいずれも志水文庫蔵である。(川)

#### ○幸若舞の判官物

幸若舞は、能・平曲と並んで中世庶民の耳目を楽しませた芸能だが、「平曲」という呼称が江戸期以降のもので中世には「平家」「平語」と称されていたように、幸若舞も中世には「曲舞(〈せまい)」と称されてい

た。能の大成者・世阿弥の伝書等にも「曲舞」はしばしば記されるているが、室町中期頃の曲舞は寺社縁起物や慶祝・無常をよみ込んだ短い謡い物に近い内容と推測され、現存の幸若舞の曲目(幸若舞曲・舞の本)の特質である義経物・曽我物・源平物といった、軍記物中心の叙事的語り物とは明らかに質を異にしているようである。以下この展示で「舞」とは、詞章の現存する幸若舞について述べる。

現在詞章が残っているのは 50 曲あまりである。新曲を意味する「新曲」の語が始めて出てくるのは天文二十三年 (1554) なので、それ以前に曲目が一応固定していたものと思われる。詞章は、慶長頃から「舞の本」として古活字版が、続いて整版が刊行されて、読み物として広く普及した。主な曲は、(1) 説話・物語系の作品 (入鹿・大織冠・百合若大臣・信田・満仲(まんじゅう)) と (2) 軍記物系の作品があり、さらに後者は、その典拠によって以下のようにわけられる。

- ①源平物(伊吹・夢合せ・馬揃・浜出・築島・硫黄が島・文学・木曾願書・敦盛・那須与一・景清)、
- ②義経物 (笛之巻・未来記・烏帽子折・腰越・堀川夜討・四国落・富樫・笈捜(おいさがし)・八島・清重・ 高館 (たかだち))、
- ③常葉(ときわ)物(伏見常葉・常葉問答)、
- ④ 曽我物 (元服 曽我 · 和田酒盛 · 小袖 曽我 · 剣讃嘆 · 夜討 曽我 · 十番切)
- ⑤太平記物(前述の「新曲」)

こうしてみると軍記物(『平治物語』『平家物語』『義経記』『曽我物語』『太平記』)を典拠としたりそれと係わりの深い内容のものが多くを占め、中でも義経に係わる作品は数が多いことがわかる。幸若舞の詞章はそれらのいわば一種の翻案物ともいえるのだが、単なる翻案とは違い、まぎれもなく独自の文芸世界を形成しているのも特徴である。(大)

# ○御伽草子の判官物

御伽草子は室町時代から江戸初期にかけて作られた物語草子の総称。御伽草子は約500編、大体30~40 頁分の短編で制作年時・作者も殆どが不明だが、物語文学の場合のように少数の人々に限らず、広い階層の 読者を予想して執筆されたものらしい。したがって、平安時代以来の貴族社会の物語に比べると、登場人物 や扱われた世界は変化に富んでいるが、創作手法は類型化し主題の似通った作品も多い。分類としては、国 文学者の市古貞次による以下の六分類が一般的である。

- ①公家物…物語文学の流れをひく作品や歌物語・歌人説話など
- ②武家物…軍記物語の序列を引く作品群。
- ③宗教物…僧侶・出家や神仏に関するもの
- ④庶民物…町人その他を扱ったもの
- ⑤異類物…人間以外の動植物・道具類などを人間同様に描いたもの
- ⑥異国物…外国(天竺や唐土)を舞台にしたもの

このうち②武家物は、義経に係わる「判官物」が圧倒的に多く(『天狗の内裏』『御曹司島渡り』『浄瑠璃御前物語』『弁慶物語』など)、当時の世相を示している。ほかに、英雄伝説に取材する作品(『酒吞童子』『羅生門』『田村草子』『俵藤太物語』)のほか、源平時代の伝説に取材した平家関係の『横笛草子』『小敦盛』、義仲関係の『唐糸草子』『清水冠者物語』などがある。判官物のように民衆に人気のあった物語は、江戸時代に入ると浄瑠璃に流入して長く生命を保つことになった。(大)

## ○[絵本よしつね] (展示 4)、『絵本義経嶋巡り』(展示 5)

江戸時代、上方・江戸では絵を中心とした子ども向けの読み物が出版された。江戸では中本サイズの赤本と呼ばれる一連の書物が子ども向けの読み物として刊行されたことはよく知られている。一方上方では、享保頃から中本より一回り大きな半紙本サイズの子ども向け読み物が出版された。[絵本よしつね](展示 4) 『絵本義経嶋巡り』(展示 5) もそうした上方の子ども向け読み物の一つである。

[絵本よしつね](展示4)は、義経の後半生を取り上げた絵本である。堀川御所への土佐坊の夜討ち、大物浦での知盛の霊との遭遇、吉野山での静との別れ、吉野山での合戦、安宅関での詮議の五場面がそれぞれ見開きで描かれる。物語は書かれず、絵の解説的な文章が僅かに添えられている。『義経記』からの影響はなく、絵尽に似た形式も含めて、浄瑠璃・歌舞伎からの影響が濃い。展示しているのは吉野山での静との別れの場面であるが、「よしつねはつねの皷を渡し都へおくり給ふ」という説明が付されて静が皷を持つ絵が描かれている。「初音の鼓」が義経から静に渡されるのは、若干の状況の違いはあるが浄瑠璃『義経千本桜』の踏襲である。一方の『絵本義経嶋巡り』(展示5)は、義経が奥州からその周辺の島々を巡り、異形の物にであう物語で、御伽草子「御曹司島渡」の系譜を引くといえる。 ただしこの絵本は、冒頭に「判官義経は奥泰衡のはからひにて蝦夷が嶋へわたりたまひ」とあり、本展示の最終部に示す衣川の合戦で死なずに蝦夷へ渡った義経の物語でもある。義経が巡る島は、海賊の住む島・小人島・鬼神の住む島・小人島の住人よりさらに小さな人の住む島・目なし島などである。志水文庫では上巻一冊のみを所蔵するが、本来上下二巻からなる。上下二巻所蔵の東京大学国文学研究室所蔵本には刊記があり、天明三年(1783)に京都の書肆菊屋喜兵衛の刊で、京都の浮世絵師下河辺拾水が絵を描いていることがわかる。(川)

# B 【純生~鞍馬入までの物語】

『義経記』は平治の乱での義朝の敗走とその死から物語が始まり、以下のように話は展開する。義経の母常盤御前は、七歳の今若・五歳の乙若・生まれたばかりの牛若を連れて都を遁れ、いったんは大和国宇陀郡に隠れ住むが、母が捕らわれたことを知り都へ戻る。子どもを成人させるために常盤は清盛に従うが、三人の子は別々の場所で育てられる。乳飲み子であった牛若は四歳まで母の元で育ち、その後山科で育てられるが、七歳の時に鞍馬の別当東光坊の阿闍梨に預けられる。

ところで、常盤御前の都落ちはむしろ『平治物語』下巻に詳しく書かれている。宇陀郡へ向かう途中、伏見の里で里人に助けられ数日滞在するという『平治物語』での展開は、舞や古浄瑠璃の「伏見常盤」に受け継がれる。舞の「伏見常盤」では、前半には平治の乱までの常盤御前の物語が語られ、後半は都を落ちて彷徨う常盤と子ども達の姿が語られている。近世の浄瑠璃では、この伏見の里人が実は平家方の武将平宗清の忍び妻で、彼女は源氏の忠臣の藤九郎盛長の妹という設定になっていく。常盤・宗清・牛若(義経)の関係は、展示資料7『源氏烏帽子折』あたりから始まり、『平家女護島』(展示 13)第四を経て、『一谷嫩軍記』(展示 41)まで受け継がれていく。『一谷嫩軍記』(展示 41)では、平家滅亡後に石屋の弥陀六と姿を変えて平重盛の娘を育てている宗清に、義経が次のように声を掛ける「其昔、母常盤の懐に抱かれ。伏見の里にて雪に凍へしを。汝が情を以て親子四人が助りし嬉しさ。其ときは我三歳なれ共面影は目先に残り。見覚有眉間のほくろナコリヤ。隠しても隠されまじ。重盛卒去の後は、行方知ずと聞きしが。ハテ堅固で居たな満足や」。雪の中を三人の子どもを連れて彷徨う常盤と宗清の図は浮世絵の画題にもなる。(川)

# ○古浄瑠璃『義経記 初段』(展示 6)、浄瑠璃『源氏鳥帽子折』(展示 7)

明暦から万治頃、古浄瑠璃では『曽我物語』や『太平記』などを題材とする連作物の浄瑠璃が語られていた。『義経記 初段』(展示 6) もその連作物浄瑠璃の一つである。内容は、平治の乱での悪源太義平の活躍から始まり、義経の高館での死までを七巻に分けたものである。それぞれが六段構成になっている。現存する古い正本は、井上大和掾のものであるが、全段は揃っていない。後に江戸の土佐少掾が七巻の正本を刊行しており、それは現存する。志水文庫所蔵の浄瑠璃『義経記』は、大和少掾正本の初段(展示 6) と四日目(展示 51)、土佐少掾正本の三之巻(展示 39) と四之巻(展示 52) と六之巻(展示 55) である。

『義経記 初段』初段は、「あくげんた都へ上り給ふ事(悪源太都へ上り給ふ事)」「あく源太さいごの事(悪源太最期の事)」「よりともいつへるざいの事(頼朝伊豆へ流罪の事)」「ときわ六はらへめさる、事(常盤六波羅へ召さる、事)」「うしわかくらま入の事(牛若鞍馬入の事)」「か、みのしゆくがうだうの事(鏡の宿強盗の事)」の六段構成である。表紙題簽に大きく「伏見常盤」とあり、「ときわ六はらへめさる、事」が浄瑠璃の中心と見なされていたことが窺える。残念ながら志水文庫蔵の正本は、「よりともいつへるざいの事」まででそれ以降は欠丁となっている。大阪大学図書館赤木文庫蔵の正本で確認すると、『平治物語』や舞「伏見常盤」と同じ展開の後、常盤御前は捕らわれた母を助けるため上洛、後に牛若は鞍馬寺に預けられそこで学問と兵法を身につけるが、金売吉次と出逢い奥州へ下ることとし、鏡の宿で強盗百合太郎を討つまでが語られている。

『源氏烏帽子折』(展示 7) は、近松門左衛門作の浄瑠璃である。初演は元禄三年 (1690) 正月竹本座(推定)。竹本義太夫の正本の他に、義太夫本を改訂した山本角大夫の正本もある。展示 7 は角大夫正本、展示 22 は義太夫正本である。全五段の内二段目が「伏見常盤」の物語であり、三段目以降が舞「烏帽子折」や能「烏帽子折」に取材しながら、烏帽子屋の娘東雲と牛若の恋物語など新たな物語が展開していく。この部分については日で解説する。二段目は、都から大和国へ下る常盤御前の道行から始まる。伏見の里に着いた常盤親子は、弥平兵衛宗清の忍び妻で藤九郎盛長の妹である白妙の家に行きつき、一夜の宿を乞う。白妙は、夫宗清に見とがめられる前に落ち延びるようにと告げるが、疲れ果てた常盤は軒下に倒れ伏す。幼い三人の子どもは着ている衣を脱いで母を介抱する。その様子を垣間見た宗清は、常盤親子と気付きつつ見逃す。さらにそれを見ていた藤九郎盛長は宗清の温情に感謝する。母の懐に抱かれていた牛若が兄たちにならって母を介抱する様子が次のように綴られている。(川)

牛若目覚まし這ひ出て見るを見まねに衣を脱ぎ。同じく母に着せ参らせ。手足も震ひ凍ゆれど其色みせず歯ぎしみし。拳を握り堪ゆる体(適宜漢字を宛てた)

#### C 【鞍馬山での物語】

鞍馬の別当である東光坊阿闍梨は亡き義朝の祈りの師であった。その縁で、義経の母常磐は牛若を預かってくれるように頼み、東光坊は義朝の子息ならと喜んで引き受けたという。(『義経記』巻一「牛若鞍馬入の事)牛若が鞍馬入りした年齢については、7歳(『義経記』)、11歳(『尊卑分脈』)説がある。11歳は貴族の子弟の学問始めの時期に相当する。『義経記』で7歳とするのは、同書の成立時期(室町時代)の風習で学問始めの年齢が7歳であったからではないかとされている。

鞍馬山で牛若は遮那王(しゃなおう)と名乗り、当初は学問に精進したが、やがてその身の上を知り、平家打倒を志して密かに武芸に励むようになる。剃髪せず 16 歳を迎えた牛若は、この年に鞍馬を出て奥州へ旅立つ。(16 歳という年齢は「成人」の時であり、また義朝の子息として罪が科される時期になったことを意味するとも言われる。)(以下詳細はF)

鞍馬寺の本尊の毘沙門天は戦いの神であることから武将の信仰が厚かった。(『義経記』にみえる鬼一判官という陰陽師に由来する『鬼一判官虎の巻』という兵法書の写本が今も伝わる。)ここで彼は、夜ごと天狗から兵法を習得したと『平治物語』は記している。(大)

#### ○能「鞍馬天狗」(展示 8)

五番目物、五流(観世・宝生・金春・金剛・喜多)現行、作者未詳 前シテ…山伏 後シテ…天狗 子方…牛若丸 子方(前)…稚児(数人) ワキ(前)…東谷の僧 ワキツレ(前)…同伴の僧 オモアイ(前)…西谷の能力 アドアイ(数人)…小天狗

[梗概] 鞍馬山の僧が大勢の稚児を連れて花見に出かける。小舞などに興じていると、その席にぶしつけな山伏が来て座り込むので、僧たちは立ち去るが、一人だけ居残った稚児が山伏に親しげにことばをかける。それが源義朝の遺児・牛若だった。平家の稚児たちにのけ者にされていることに同情した山伏は、牛若と連れ立って山々の桜を見て歩くが、自分は実はこの山の大天狗だと明かし、明日の再会を約して僧正ヶ谷に立ち去る。〔中入〕牛若が薙刀を手にして待っていると、大天狗が日本各地の天狗たちを引き連れて現れる。大天狗は、漢の張良が黄石公に沓をささげて兵法を授かった故事を物語り、牛若に刀を授け、将来の守護を約束する。

前場は、稚児に扮する幼い子方が大勢登場することで知られる作品。平家方の稚児にいじめられる牛若と 天狗の交流が描かれる。後半で天狗が日本の各地を連れまわるのは、いまは平家の天下だけれど源氏の味方 があちこちに大勢いると励ましているのだという解釈もされる。後場は、実際の舞台には天狗は一人しか登 場しない。(大)

# ○鞍馬山の天狗と牛若の図

鞍馬山の大天狗僧正坊と牛若の姿は、寺社に奉納される絵馬や浮世絵の画題となっている。「鞍馬天狗牛 若図」のように、天狗の腕に乗った牛若の姿というのも定型である。(川)

# ○義経の生涯と『天狗の内裏』、舞「未来記」

『義経記』は、義経の一代記であるが、Aの解説に記したとおり、そこには書かれていないいろいろな物語が御伽草子や舞には記されている。それらの物語を義経の生涯の順番に並べたならば、『義経記』とはまた異なる義経の一代記が展開していくことになるだろう。そうした義経の一代記をダイジェストで語るのが舞の「未来記」や御伽草子『天狗の内裏』である。鞍馬山の大天狗が住む天狗の内裏におもむいた牛若は、そこで己の過去と未来を知る。舞「未来記」では大天狗から告げられるその過去と未来の物語が、御伽草子『天狗の内裏』では、九品の浄土で大日如来となっている父義朝から告げられるという展開になる。『天狗の内裏』は諸本がありその異同も複雑であるが、基本的には古写本、刊本、十一段本の三種に分けられる。展示11は写本ではあるが寛永正保頃刊本の改作と位置づけられている(箕浦尚美氏「『天狗の内裏』版本改作本について・・付実践女子大学山岸文庫蔵本翻刻」(語文)87)。義朝は牛若の未来を次のような言葉から語り始める。

先ツ来年は十四才也。父か十三年の供養にせんせいをたすけ悪だうを見立て五條の橋にて千人切を仕れ(→E)

その後、弁慶との出逢い(→ E)、金売吉次と共に奥州へ下ること、その道中に十禅寺の小松原で関原与一を討ち捨てること(→ G)、後を追ってきた母常盤は美濃と近江の境で熊坂という強盗に殺されること、その仇は垂井の宿で討つことが出来ること(→ I)、駿河国番場で病に倒れるが浄瑠璃姫に助けられること(→ J)、法眼(鬼一法眼か)の娘皆鶴の手引きで兵法書を手に入れること(→ F)、鬼の嶋の大王が持つ虎の巻物を娘の朝日天女の手引きで手に入れること(→御伽草子「御曹司島渡り」)、十八才で奥州を出立し八島・壇浦で平家を滅ぼすこと(→ K)、その際に教経の射る矢で佐藤継信が死ぬこと(→ K)、平家は滅び義経は都の堀川の御所で崇められること(→ M)、梶原の讒言のこと(→ L)、文治四年閏四月二十八日に奥州衣川高館御所で死ぬこと(→ R)が牛若に告げられる。

『義経記』に書かれている物語だけではなく、関原与一を討つ話、浄瑠璃御前や朝日天女との恋物語、母常盤が強盗に殺されてその仇を討つ「山中常盤」の物語などの『義経記』にはないが御伽草子や能や古浄瑠璃で語られる物語が、これから牛若が経験することとして語られているのである。牛若・義経に纏わる物語が広範囲に周知のものであったということがよくわかる。(川)

#### D 【常盤御前との物語】

『義経記』では、義経の母の常盤御前は、巻第一で鞍馬寺に牛若を預けた後は登場しない。史実の常盤は、清盛の娘を産んだ後、一条大蔵卿長成に嫁して一男一女を産んだことがわかっている。しかし、御伽草子、能、浄瑠璃の世界では、常盤と牛若の関係はもっと密なものであった。能「橋弁慶」前半(展示 12)では、五条大橋で父の供養のために千人斬りを行う牛若のことを知った常盤は、牛若を呼び寄せて教訓をする。能「橋弁慶」前半の常盤による教訓は、例えば宇治加賀掾の古浄瑠璃『牛若千人切』の中にも取り込まれている。近松門左衛門作の浄瑠璃『孕常盤』では、五条橋で牛若は常盤と出逢い、常盤が平家呪詛のために清水詣でをしていることを知る。常盤は五条橋での千人斬りを咎めるが、それが家来を探すためであると聞き屋敷へ

帰っていく。同じく近松門左衛門作の浄瑠璃『平家女護島』(展示 13)三段目では、朱雀御所で源氏再興の企てに一味する男たちを集める常盤御前の姿が描かれる。こうした設定は、浄瑠璃『鬼一法眼三略巻』(展示 15・19)にも受け継がれ、四段目の一條大蔵卿長成邸の場で夜な夜な平家調伏を行う常盤の姿が描かれている。このように常盤御前を、清盛に身を任せ、一条大蔵卿に嫁しても、源氏再興の意志を持ち続け、息子牛若を助ける女性であったとして描くのは、近世の演劇・文学の大きな特徴と言える。これらは一応史実を踏まえながらも行われた創作であるが、一方で史実を全く無視した常盤の生涯を描く一連の御伽草子や古浄瑠璃が存在する ( $\rightarrow$ 1)。(川)

# ○「笛之卷」(橋弁慶前)(展示 12)

五番目物、観世流現行、作者未詳

前シテ…常磐御前、子方…牛若丸、ワキ…羽子田十郎顕長

観世流には、「橋弁慶」の前場をまったく別の筋書のものに入れ替えた小書(=特殊演出)「笛之巻」がある。 この小書は、「笛之巻」として独立した別曲に扱うことが多い。

内容は、前場は羽田秋長 (ワキ) の勧めにより、常盤御前 (前シテ) が学問を怠り辻斬りをする牛若 (前子方) をいさめ、後場へとつづく。(大) E【弁慶との物語】

『義経記』では、武蔵坊弁慶は熊野別当「弁しょう」(\*御伽草子『弁慶物語』は「弁心」、御伽草子『橋弁慶』は「湛増」)が二位大納言の姫をかどわかして生ませた子「鬼若」で、出生時にすでに髪や歯が生え揃って2、3歳くらいの姿であったという。やがて比叡山西塔の桜本僧正(『平家物語』には「くわん慶」)のもとで学問に励むが、長ずるに及んで乱暴な振る舞いが目立つようになる。師にも疎んじられいたたまれなくなって自ら剃髪、父と師の名から一文字ずつ取り、さらに悪を好みながらも往生を遂げた「西塔の武蔵坊」にあやかるため「武蔵坊弁慶」と名乗って比叡山を後にした。

その後、弁慶は千本の太刀を集める悲願を縦、夜ごと強奪を繰り返していたが、最後の一振りで宿願達成という時に牛若に出会う。二人の対面、京都五条の橋の上での稚児姿も艶やかな牛若と七つ道具を背にした大男の弁慶という対称的な二人の対決と弁慶の屈服の場面はよく知られている。さらに翌日、弁慶は清水寺で決闘して降参し、君臣の契りを結ぶこととなった。

以後は、弁慶は常に義経の傍に居て武勇を現す。後に詳述するように、後の奥州下りでも弁慶の機転によって義経一行は無事に現地に到着した(→P)。最期の衣川の戦い(→R)では、義経の自刃の時間を稼ぐために敵方の攻撃を防ぎ、全身に矢を受けて「立ち往生」した豪傑として描かれている。

弁慶については、『義経記』巻三では詳細に記されるが、出身や生没年などは未詳の伝説的な人物である。 義経に生涯仕えた忠実無比の家来とされていながら、確かな資料にはほとんど登場しない。(鎌倉方の史書『吾妻鏡』には義経都落ちの記事(文治元年(1186)十一月三日)と大物浦での遭難の記事(同六日)の2度弁 慶の名が見えるので、実在したことはわかる。)(大)

# ○能「橋弁慶」解説(展示 12)

四番目物、五流 (観世・宝生・金春・金剛・喜多) 現行、 作者未詳シテ…弁慶 子方…牛若丸 トモ…弁慶の従者 アイ…都の者 (2人)

[梗概] 弁慶は従者から、最近五条橋に不思議な少年が現れて人を斬るという噂を聞き、退治に出かける。 少年というのは牛若で、母の言いつけで明日は鞍馬寺に入る手はずなので、今夜が名残りだからと五条橋に 出かける。すると物々しい姿の弁慶が大薙刀をかついで現れたので、牛若は弁慶にからむ。そこで二人の格 闘が始まるが、目まぐるしく動く牛若の早業に、弁慶の剛勇も抗しきれず、薙刀を打ち落とされてしまう。 降参した弁慶は少年が源牛若と聞いて主従の約束を結ぶ。

荒法師と少年の斬合いを見せ場とする童話風の作品。『弁慶物語』『義経記』などの室町時代の弁慶に係わる物語に準拠しているとされる。この種の物語の多くは千人斬りを弁慶の所行としているが、中には(天理図書館所蔵『橋弁慶』など)千人斬りをしたのは牛若だとするものもあり、本曲も牛若説をとっている(御伽草子『弁慶物語』も同様)。また、さらに本曲には室町期の牛若の英雄的イメージが投影され、超人的な能力の持ち主として描かれているとも云えるだろう。これも人形浄瑠璃「鬼一法眼三略巻」(展示 15) などの原拠とされる。(大)

# 〇古浄瑠璃・浄瑠璃での「橋弁慶」

五条橋での牛若と弁慶の戦いは、牛若時代の義経のエピソードの中でも鞍馬山での天狗とのやりとりと並んで有名であり、近世の演劇にも物語にも絵画にもさかんに取り入れられる。浮世絵には弁慶のかざす長刀の上や橋の欄干に高下駄を履いたまま片足で立つ牛若の姿を描いたものが少なからずある。資料 16 はそうした浮世絵の一つで、鳥居派による浮世絵(複製)である。現在の文楽では、『鬼一法眼三略巻』四段目切が「五条橋」という題で独立して上演されている(展示 15)。ところで、牛若が五条橋へ来るのは、父の供養として千人切りをするためから次第に、『孕常盤』のように家来を探すためという理由に変化していくようである。

さてもその後、御曹司は十五と申春の頃、鞍馬の山をはくれたけの、また夜をこめてそ、お立ちある よそなる者は、十や二十て、親の敵を、取るそかし、しょせんたゝ、わらはも五条の橋詰にて、千人切 申て、もしや平家の一門を、一人なりとも切る事ならは、父の敵に、奉せんと思し召し(『常盤物語』) 牛若今は陳じかね。仰尤也此上は何をか包み申べき。当年は父上の十三年にておはします。世が世ならばいかならん追善をもなすべきに。せめての事の御供養に千人切をと心ざし。過し夜までにはや九百九十九人切り。今一人に成候。(宇治加賀掾古浄瑠璃『牛若千人切』)

牛若いた、き懐中し。全く無益の殺生ならず。源の牛若が下人一人持たずして。大事は思ひた、れずと 千人切を企て。手並みを見届召使はんと。夜前迄九百九十九人切て候へ共。是ぞと思ふ下人もなしと。 語り給へば (近松門左衛門作浄瑠璃『孕常盤』)

是今ならで有やうは言はぬ。千人切とは偽なんの咎なし人を切らふぞ。毎夜毎夜此橋へ来るは往来の人の中にも。武士たる者に当つて見。器量なき奴は逃次第。うろたへて切らる、奴は切られぞん。手に立つ者は従へ靡けし其中にも(中略)九百九十九人迄太刀の下に。従へなつく。今一人手に付れば千人の家来を持(浄瑠璃『鬼一法眼三略巻』)

展示 16 は、鳥居派の浮世絵の複製である。縦の画面に、七つ道具を持った弁慶と、橋の欄干に高下駄で 片足立ちする牛若の姿が描かれている。(川)

## F 【兵法秘伝獲得の物語】

一谷の合戦・屋島の合戦・壇浦の合戦と瞬く間に平家を滅ぼしたかのように見える義経は、特別な兵法術を会得していたという伝説が付与されていた。鞍馬山で天狗から兵法を学んだという伝説もそうであるが、特別な兵法術を記した書を学んでいたという伝説も色々な形で語られている。『義経記』巻第二の最後の物語「義経鬼一法眼が所へ御出の事」は、一条堀河に住む鬼一法眼が所持する十六巻の六韜兵法の書を、鬼一の娘幸寿前の手引きで手に入れる話である。御伽草子「みなづる」は同様の物語であるが、鬼一の娘は皆鶴姫という名で、物語の主眼は牛若と皆鶴の恋物語となっている。牛若と皆鶴の出逢いや求婚の場面には、Jに展示する『浄瑠璃御前物語』(展示 26・27)の影響を見ることができる。また同じく御伽草子『御曹司島渡り』は、北方の千島の都喜見城に住むかねひら大王が持つ大日の法を、大王の娘朝日天女の手引きで手に入れるという物語である。こうした兵法秘伝獲得の物語は古浄瑠璃・浄瑠璃の中でも展開していく。古浄瑠璃では宇治加賀掾の『遊屋物語』(展示 18)、浄瑠璃では『鬼一法眼三略巻』(展示 19)が代表的な作品であろう。(川)

# 〇能「湛海(たんかい)」(展示 17)

四番目物、金剛流現行、作者未詳

シテ…湛海 子方…牛若 ワキ…鬼一法眼 ワキツレ…法眼の従者 アイ…法眼の家人 〔梗概〕 鬼一法眼は、兵法の弟子牛若が兵法秘伝書を盗み取ったとして、これを討つべく聟の湛海を呼び、 湛海はこれを引き受ける。〔中入〕夜半、法眼の命で五条天神へ呼び出された牛若を待ち伏せした湛海は、 長刀で牛若に斬りつけるが、左右へ飛び上がってかわす牛若に逆に首を落とされる。

後場の、長刀を遣うシテ湛海と小太刀でこれをかわす子方牛若の斬組みが眼目となる。この後場は、牛若と弁慶との斬組みを見せる現行曲「橋弁慶」と同じ趣向。『義経記』巻第二の「鬼一法眼の事」による現在能(=登場人物がみな生身の人間で、時の流れに沿ってストーリーが展開するタイプの能)。(大)

# ○古浄瑠璃『遊屋物語 付タリ牛若兵法之恋慕』(展示 18)と浄瑠璃『鬼一法眼三略巻』(展示 19)

『遊屋物語』(展示 18)は、延宝四年 (1676) に上演された宇治加賀掾の古浄瑠璃である。初段は能「熊野」をほぼそのまま利用しており、これが『遊屋物語』という題名の由来である。二段目以降が付タリ部分「牛若兵法之恋慕」である。清水寺轟御坊から今出川に住む鬼一法眼が「張良の秘書」までも持つと聞いた牛若は、身をやつして法眼を訪ねる。色を好む鬼一法眼は、牛若の美しさに惹かれて招き入れる。鬼一法眼の一人娘の桂の前は美人であるだけでなく、兵法の書を読み「女なれ共家業を継ぎあんに伍子孫子が兵に叶ひ張良諸葛か。法ををも得軍慮の奥義くもりなし」という女性である。対面した牛若と桂の前は互いに引かれあう。桂の前の手引きにより、牛若は鬼一法眼が持つ兵法書をすべて見ることができる。全てを知った鬼一法眼は、弟子の湛海に牛若を討ち取らす計略を巡らすが、牛若は桂の前の機転により逆に稲荷の社で湛海を討ち取り、桂の前と共に紀州へ落ち延びる。『義経記』や「みなづる」と同じ展開の物語ながら、鬼一法眼の娘桂の前は兵法に通じ、牛若と共に湛海と戦い、共に紀州へ向かうという自立した女性として描かれている。

こうした桂の前の性格を受け継いで造型されたのが『鬼一法眼三略巻』(展示 19)に登場する鬼一法眼の娘皆鶴姫である。清盛の御前で父の弟子の湛海を長刀で打ち据え、父の館の菊が咲き乱れる庭で、菊の枝を手にして虎蔵こと牛若を口説〈可憐で積極的な皆鶴姫は、名前は御伽草子「みなづる」から受け継いでいるが、その性格は明らかに『遊屋物語』(展示 18)の桂の前から受け継いだものである。その『鬼一法眼三略巻』(展示 19)は、享保十六年(1731)九月竹本座初演の浄瑠璃である。牛若・常盤御前・弁慶・鞍馬山の天狗僧正坊・鬼一法眼・その娘などが入り交じり活躍する『鬼一法眼三略巻』(展示 19)は、中世以来の牛若の伝説を取り込みつつ、鬼一法眼が実は鞍馬山で牛若に兵法を教えた僧正坊であったなど、新たな展開を遂げている。展示しているのは、『鬼一法眼三略巻』の絵番付である。絵番付は、享保期の後半期に複数見られるが、普通の配役表を記した役割番付とは異なり、初段から五段目までをコマ絵のようにして並べた特殊な形になっている。(川)

# G 【「関原与一」の物語】

鞍馬を出て金売吉次と共に奥州へ向かう牛若には、様々な事件がふりかかるが、その最初が平氏の郎等関原与一との争いである。ただし関原与一の物語は『義経記』には載っていない。中世成立のものは、舞『鞍馬出』の後半と謡曲「関原与一」(展示 20)があげられる。都を出た牛若が松坂辺りで吉次を待っていると、向こうから関原与一とその一党がやって来る。通り過ぎようとしたとき与一の馬が蹴上げた泥が牛若にかかる。これを咎めた牛若と与一の間に争いが起き、牛若は鞍馬山で習い覚えた天狗の兵法を駆使して与一とその一党を追い払う。牛若と与一の遭遇場所は、舞では松坂とあるのが、能では美濃国山中となっている。この顛末は『天狗の内裏』(展示 11)でも牛若の身に起きることとして語られる。

十善寺の小松原にて美濃国の住人関ヶ原与市といふ者が三拾六騎に騎馬打せ都に打て登る時、汝に逢て くはんたへすべし。相かまへて夫が平家の悪逆にてある間、あまさずのがさず打て捨よ

近世の浄瑠璃にはほとんど受け継がれることがなかったらしい関原与一譚であるが、古浄瑠璃の時代には 牛若の物語の一つとして語られていた。それは、近世初期に上方で刊行された子ども向け絵本『義経高名揃』 の中にも、橋弁慶や熊坂の物語と並んで、関原与一譚が描かれていることからも推測できる。古浄瑠璃正本 の書写である可能性が高い草子『常盤物語』では、十禅寺小松原で吉次を待つ牛若の後から、本国へ帰る関 原与一とその郎等達が大鷹小鷹を据えて騎馬でやってくる。蹴上の水の口論から戦いとなり、牛若は天狗から習い覚えた兵法の術を駆使してついには与一を切って捨てるが、一子犬坊丸の命は助けるという展開に なっている。古浄瑠璃の正本としては、零葉が『古浄瑠璃正本集』第一の口絵に収録されているのが古くか ら知られていたが、阪口弘之氏が所蔵の古浄瑠璃正本『関原与市』を『藝能史研究』167 号で紹介され、本 文が零葉とほぼ一致することを示された。その展開や本文は先に挙げた『常盤物語』と大差が無い。(川)

# ○能「関原与一」解説(展示 20)

四番目物、喜多流現行、作者未詳

シテ…牛若丸 ツレ…従者 ワキ…関原与一 ワキヅレ…与一の部下 アイ…早打

〔梗概〕牛若丸が鞍馬山を出て東国に下る途中、美濃国山中に着く。そのとき中川庄に着任し入部しようとしていた関原与一の馬が牛若に泥をはねかける。怒った牛若が与一に苦情を言うと、与一は従者七十騎とともに斬りかかる。しかし牛若は一人で対決し、与一も斬り伏せられる。

牛若の超人的な武芸を見せる作品。少年を主役とした点、現在能としては珍しく太鼓の入る点が特徴。太 鼓は、能では人間以外の鬼や妖怪、霊などが登場する作品で使われる。(大)

#### H 【元服】

16歳になった牛若は、鞍馬山を抜けだし(『平治物語』・『尊卑分脈』は、陵介(みさきのすけ)重頼の手引きとする)、金売商人吉次と同道して奥州下りをする。道中、近江国鏡宿で吉次が盗賊団に襲われるが、牛若が退治して事なきを得る。その後、熱田神宮に立ち寄る。熱田神宮の先代大宮司は父・義朝の舅であり縁が深いことから、此処で牛若は元服することに決めた。現在の大宮司(小舅)が烏帽子親となり、「九郎義経」と名を改める。この名は、八男ゆえ「八郎」とすべきところ叔父の鎮西八郎為朝を憚って「九郎」とし、名は祖父・為義、父・義朝、長兄・義平の一字「義」をとったものであった。

なお、元服した場所について、『平治物語』は近江国鏡宿(滋賀県竜王町)と伝えている。また『吾妻鏡』 では、烏帽子親もなく儀式的なことは一切せずに、自分で元服したとしている。(大)

# ○ 能「烏帽子折」解説(展示 21·23)

四・五番目物、観世・宝生・金剛・喜多流現行、宮増作か

前シテ…烏帽子屋の主人 後シテ…熊坂長範 子方…牛若丸 前ツレ…烏帽子屋の妻 後ツレ…長範の部下 ワキ…三条吉次 ワキツレ…三条吉六 オモアイ…小賊 アドアイ…小賊 (3人) アドアイ…六波 羅の早打 アドアイ…赤坂の宿の亭主

[梗概]三条吉次という商人が都から奥州へ下る途次、少年に同行を頼まれる。少年は鞍馬山を逃れた牛若だった。近江の鏡宿に着いたときに、六波羅の早打が通り、牛若を召し捕れと告げて回る。これを耳にした牛若は、身なりを調えるために元服を思い立ち烏帽子屋を訪れる。烏帽子屋の主人は源家にゆかりの男で、源氏の少年と知って快く求めに応じ、祝福をする。その後、一行が美濃の赤坂に宿泊した夜、盗賊の熊坂長範(ちょうはん)が大勢の手下を従えて押し寄せてくる。牛若はただ一人で相手をして追い散らし、首領の長範まで斬り伏せてしまう。

牛若東下りを舞台化した作品。場面が次々と展開し、構成の複雑さは他に類をみない。登場人物も14人ないし17人を数える大がかりな能で、子方が大活躍し、前場は対話を主体に牛若のけなげさを、後場は牛若の強さを見せる。また、斬られ手も宙返りや仏倒れなどの離れ業を見せる。本曲では前場・後場を通して舞台にいるのは子方で、筋書の上でも演技の上でも子方が主役的存在となる。(「鞍馬天狗」の子方で初舞台を踏み、「烏帽子折」を子方の修行の到達点とすることの多いのはそのためである。)前シテの烏帽子屋と後シテの長範とが別人であり、しかも現在人(=生きている人間)であるというのは、能としては珍しい例である。(大)

#### ○『鳥帽子折』(展示 22) 解説

元禄三年(1690)正月竹本座初演(推定)の『烏帽子折』(別名『源氏烏帽子折』)は、近松門左衛門作の浄瑠璃である。人気曲であったらしく、現存する正本は数種類の版がある。初演の際は、第五段に伊勢神宮の初演を当て込んだ「はしらごよみ」という節事がついたが、再演の際にはそれが「牛若宮めぐり」に差し替えられている。本来は竹本義太夫の語った浄瑠璃であるが、京都の古浄瑠璃の太夫である山本角太夫の正本が現存する。また古い形の人形浄瑠璃の形態を残す佐渡の文弥人形や東二口の文弥人形浄瑠璃では、現在もそのレパートリーの一つに『源氏烏帽子折』が含まれている。展示している本は竹本義太夫の正本で、第五段が「牛若宮めぐり」なので再演の際の本である。この本は、通常の浄瑠璃の本よりも大きく仕立てられており、「献上本」と呼ばれる。

『烏帽子折』の初段から二段目までは義経の母常盤御前を中心とした物語で、三段目以降が牛若の物語となっている。特に三段目が題名の由来となる段で、能の「烏帽子折」から派生した新たな物語が展開する。三条烏丸の烏帽子屋五郎太夫方に烏帽子を求めに来た牛若は、そこの娘のしののめと恋仲になる。牛若は烏帽子屋で自ら烏帽子を付けて元服し九郎義経と名乗る。しののめは、店の烏帽子を数多く掛け並べて源氏の一族郎党が祝儀に馳せ参じた体を語る(「ゑぼし折名づくし」)。五郎太夫は御賞金を目当てに平家方に義経を訴人し、討手の長田庄司を連れてくるが、長田はしののめの語りを本当に源氏の武将達が集まったと勘違いして怖じ気づく。駆けつけた土佐坊が長田を捕らえ、しののめを連れた義経は江州土山へと逃れ、討手を追い散らす。(川)

# | 【盗賊退治譚・常盤御前の死と仇討】

吉次と共に奥州へ向かう牛若は、その道中で様々な事件に出会うが、ことに有名なのが吉次の荷物を狙った強盗を退治した物語であろう。その物語は、『義経記』では巻第二「鏡の宿吉次が宿に強盗の入る事」で語られる。鏡の宿に泊まった吉次・牛若一行を出羽国の由利太郎と越後国の藤沢入道を頭とする強盗達が夜半に襲いかかる。吉次は逃げ出してしまうが、牛若は一人で強盗を対峙し、由利太郎と藤沢入道の首を討つ。ここに登場する盗賊の名前は、由利太郎と藤沢入道であるが、舞の「烏帽子折」能の「烏帽子折」「熊坂」では、盗賊の名は熊坂長範となっており、それが古浄瑠璃や浄瑠璃には踏襲される。牛若が討った盗賊の人数も、『義経記』では由利太郎たちの総勢は「宗徒の者二十五人、その勢七十人」、その内で鏡の宿を襲ったのは八人であったのが、舞や能では総勢で押しかけた盗賊を牛若一人で仕留めたという形に変化、これも古浄瑠璃や浄瑠璃に踏襲されていく。

一方で、古浄瑠璃ではこの盗賊退治に常盤御前の死が絡んで展開する。「山中常盤」に代表される次のような物語である。牛若が鞍馬山を出て奥州に向かったことを知った常盤御前は、侍女と共にその跡を追うが山中の宿で強盗に襲われて死んでしまう。一方、奥州にいた牛若は、母の夢をみて胸騒ぎを覚え上洛、途中の宿で母の亡霊に会い、宿の長の助けを得て母の仇を討つ。岩佐又兵衛による絵巻で有名なこの「山中常盤」の物語は、場所や設定や強盗の名前を少し変えながらも、御伽草子や古浄瑠璃に取り込まれていく。舟木本の洛中洛外図屛風には古浄瑠璃を上演している劇場が二カ所描かれているが、その一方で上演されているのが「山中ときわ」である。先に挙げた『天狗の内裏』(展示11)で父義朝が牛若に語る物語の中でも「汝が東に下ると聞は母の常盤が追懸とめん其為に跡を慕ふて下る迚、美濃と近江の境成、中山といふ所にて熊坂といふ夜盗の奴原に害せられんぞ浅間しき。」と常盤の最期が語られている。(川)

# ○能「熊坂」と「現在熊坂」

能「烏帽子折」にも登場する盗賊の熊坂長範(ちょうはん)を主人公にした能に「熊坂」がある。本曲には牛若(義経)は登場しないが、牛若一行を襲って逆に命を落とした熊坂の幽霊が、旅僧に牛若との戦いの様子を仕方話で語るという内容のもの。能では舞台は美濃国赤坂となっている。この曲を現在物に作り替え、その戦いの様子を実際に見せるのが「現在熊坂」である。

# 「熊坂」

五番目物、五流(観世·宝生·金春·金剛·喜多)現行、作者未詳

前シテ…所の僧 後シテ…熊坂長範の霊 ワキ…旅僧 アイ…所の者

[梗概] 旅の僧が美濃の赤坂にさしかった時、別の僧に呼び止められ、今日はある者の命日だから弔いを頼むと言われ、その草庵に導かれる。僧は、薙刀や鉄の棒が置いてあるのを見て驚く。庵主はこの辺は盗賊が多いので用心に備えてあるのだと言い、僧の身であさましいことだなどと物語るが、いつかその姿も庵室も消えて〔中入〕、旅僧は野原にいることに気づく。庵主は熊坂長範の霊の仮の姿だった。旅僧が弔いをすると、長範の霊が昔の姿で薙刀を手にして現れる。霊は生前に牛若の旅宿に大勢で攻め入ったが逆に斬り散らされ、自分も命を落としたと仕方話で物語り、夜明けとともに消えてゆく。

舞台は、草庵に向き合う二人の僧が創りあげる前場の静と、薙刀を遣って激しい動きを見せる後場の対比があざやかな夢幻能。前場のシテ・ワキともに僧の出立ちというのは珍しい。後場は、舞台に登場しない牛若の活躍ぶりをシテのあざやかな長刀さばきだけで描く。

# 「現在熊坂」

四番目物、番外曲、作者未詳

シテ…熊坂長範 子方…牛若丸 ワキ…三条吉次

〔梗概〕牛若丸が吉次に伴われて奥州へ下る途中、青葉の宿にて強盗の熊坂を討つ。「熊坂」を現在能(=登場人物が生身の人間で、時の流れに沿ってストーリーが展開する)に作り替えた、後世の作。(大)

# ○『十二段』(展示 25)の中の盗賊退治譚

浄瑠璃『十二段』(展示 25)は、元禄十一年 (1698) 正月以前竹本座初演(推定)、近松門左衛門作の浄瑠璃である。『十二段』という題名は、次のJにあげる『浄瑠璃御前物語』に由来する題名であるが、二段目に牛若の常盤御前の死と盗賊退治譚が描かれている。吉次と共に奥州へ向かった牛若は、途中で鞍馬山に忘れた笛を取りに戻る。牛若が奥州へ向かったことを知った常盤は乳母を共に後を追うが、鏡の宿を越えたところで盗賊の由利太郎村速と藤沢入道に遇い殺される。先に行く吉次を追った牛若は、鏡の宿を越えたある川岸でまどろむ内に、その川の舟長実は常盤の幽霊から常盤と乳母の最期の様や常盤の牛若を思う心などを聞く。目覚めた牛若は、鏡の宿の名主に助力を請い、母の敵を討つことにする。吉次が泊まっておりという嘘の情報を真に受けた盗賊たちは、小袖を被き待ち受ける牛若を女と思い油断するが、結局みな討たれてしまう。

盗賊の名前が由利太郎と藤沢入道である点と待ち受ける牛若の姿を見た盗賊たちの反応は、『義経記』本文に近い。しかし、由利太郎の最期が「二つになつてぞ失せてげる」とある点、いったん引き返そうとした藤沢入道が戻って牛若と戦うという展開や「長刀かしこへからりと捨て手どりにせんと大手をひろげ」て牛若に挑むところなどは、能「熊坂」に近く、『義経記』と能を折衷した盗賊退治譚となっている。(川)

# J 【浄瑠璃姫との恋】

矢矧の宿の長は、財宝を数多持ち並ぶ者なき身であったが、子どもが一人も授からなかった。そこで夫婦 で峯の薬師に参籠する。夢枕に現れた薬師如来は、夫婦に子どもがないのは、前世からの因縁であると二人 の前世を語る。諦めきれない夫婦が薬師を威さんばかりにすると、二人を哀れんだ薬師は子どもを授けてく れる。生まれたのは美しい姫君で、薬師如来の申し子ということで浄瑠璃姫と名付けられる。鞍馬山にいた 牛若は、吉次の誘いに乗り藤原秀衡を頼って奥州へ向かう。途中の矢矧の宿で泊まった牛若は、美しい管弦 の音にひかれて浄瑠璃姫の部屋の外へと来る。演奏している楽器の中に笛がないことに気付いた牛若は、持 参の笛を吹いて中の演奏と合わせる。笛の音に気付いた姫は侍女に様子を見に行かせる。侍女の報告から笛 を吹くのが牛若であると推量した姫は、牛若を座敷に招く。美しい姫と凜々しい若君は互いに相手を恋しく 思う。その夜遅く、侍女の手引きで姫の寝間へと忍び込んだ牛若は、様々な故事を引きながら姫を口説く。 その夜は結ばれた二人であるが、牛若は翌朝に奥州指して出立してしまう。東へ向かう牛若は途中で病に倒 れ、吹上の浜に捨てられてしまう。牛若の危機を知った姫は、侍女を供に跡を追い、浜の砂に埋もれた牛若 を見つけ出して介抱する。薬師如来の申し子である姫の介抱で牛若は蘇生する。再び別れた二人であるが、 戻った姫は母の勘気に触れて笹谷に押し籠められ、牛若を思いつつ死んでしまう。その後、秀衡に迎えられ た牛若は、兄頼朝の挙兵を聞いて上洛をする。途中の矢矧の宿で姫との対面を望んだ牛若は、姫の侍女の冷 泉から姫の死を聞かされる。姫の墓所を牛若が弔うと、五輪が割れて光を放ち、姫が成仏したことが明らか になる。

浄瑠璃姫と牛若の長編の恋物語は、「浄瑠璃御前物語」「十二段草子」「十二段」「浄瑠璃物語」などと呼ばれて、室町半ば頃から座頭によって語られていたようである。この物語は『義経記』には書かれていないが、「天狗の内裏」の中には牛若の未来の一つの出来事として父義朝により語られている。中世から近世にかけて絵巻や奈良絵本に描かれ、語り物として語られたこの物語が近世芸能「浄瑠璃」の名称の由来である。古浄瑠璃・浄瑠璃でもこの物語は様々に形を変えつつも語られ続ける。また、「笛の段」「忍びの段」「四季の段」などと呼ばれる管弦の場面、牛若が姫の元に忍ぶ場面、姫の館の様を述べて場面などは、他の浄瑠璃作品や仮名草子などに取り入れられていく。笛を手にして姫の館の門口に佇む牛若の姿は、浮世絵の画題ともなり、有名な浮世絵師たちが趣向を凝らしてその姿を描いている(展示 28 ~ 31)。(川)

# ○『十二だんさうし』(展示 26)、浄瑠璃『十二段』(展示 27) 解説

『十二たんさうし』は(展示 26)、全二十八丁からなる『浄瑠璃御前物語』の写本である。二十七丁表に「慶安五年半月書之」とあり、慶安五年(1652)書写された本であることがわかる。目録には「一 ふえのたん(笛の段)、二 たまものたん(玉藻の段)、三 ぬいもの、たん(縫い物の段)、四 うちのくはんけん(内の管弦)、五 しのびのたん(忍びの段)、六 四きのてう(四季のてう)、七 すかたみのたん(姿見の段)、八 しやうそくのたん(装束の段)、九 まくらもんたう(枕問答)、十 やまとことは(大和詞)、十しやうしもんたう(障子問答)、十二 御ざうつり(御座移り) 以上十二たん」とあるが、本文末尾の二十七丁表に、「以上十二段の終」「これよりふきあけのさうしに入それよりれいぜいなり」とある。更に二十七丁裏から二十八丁表かけて「吹上」以後笹谷に放逐される箇所の追記があり、二十八丁裏に「合墨付廿八

枚 下至十三段有」とある。この本に書かれている本文は、奥州へ下る牛若と浄瑠璃姫の出逢いから一夜の契りを結ぶ部分までであるが、元になった本にはその後の物語が書かれていたことが示唆される。

近松門左衛門作の浄瑠璃『十二段』(展示 27) は、三段目以降が牛若と浄瑠璃姫の物語である。この『十二段』 は、延宝四年(1676)上演の宇治加賀掾の古浄瑠璃『てんぐのだいり』と構成・本文が似通っている。その 一致のあり方が非常に密であることから、『てんぐのだいり』は最初期の近松門左衛門作と認定すべきと考 えられている。ただし『十二段』には、『てんぐのだいり』はもちろん、それ以前の『浄瑠璃御前物語』と も異なる展開も少なからずある。近松門左衛門による『浄瑠璃御前物語』の当世化(近世化)が施されてい るのである。展示箇所は節事「長生殿四き」であるが、浄瑠璃姫の館の四季の景色を語るのは従来の物語に は必須の場面であり、それを受け継いでいるものの、この「長生殿四き」は、牛若と浄瑠璃姫が結ばれたこ とを喜んだ母の長者が、四季の島台を飾るという設定の中で語られる節事なのである。『てんぐのだいり』 までの物語では、二人が結ばれたことを知った浄瑠璃姫の母親は立腹し、姫を笹谷に押し籠めることで、姫 は死を迎える。『十二段』のように母の祝福を受けるというのは、新しい展開なのである。また『十二段』では、 浄瑠璃姫の死は、従兄に当たる無道者の藤太の横恋慕故の横死という形に変化する。一方で、五段目の末尾 に牛若が浄瑠璃姫の墓前で弔うと、墓石が二つに割れて姫が現れるとい展開は、『浄瑠璃御前物語』の「五輪砕」 を踏襲している。原『浄瑠璃御前物語』が「五輪砕」までだったのか、吹上浜以後の物語は後で付け足され たのかということについては、諸説がある。原型がどうであったかという論に対して、元禄期の浄瑠璃であ る『十二段』はなんら示唆することはない。しかし『十二段』が「五輪砕」によって終結するということは、 この当時の人々が、浄瑠璃御前の物語は、「五輪砕」を以て集結すると認識していたであろうことは確認す ることが出来る。(川)

# K 【源平の合戦での活躍】

源平合戦における義経の活躍ぶりは、そのほとんどが『平家物語』に拠って伝えられている。義経が『平家物語』に登場するのは義仲追討のため都に上る頃(巻八)で、木曾義仲との対戦「宇治川」からである。 その後、木曾義仲を討ち、源平の戦いにおいて、一ノ谷・屋島・壇ノ浦とその活躍が続く。

一ノ谷合戦では、敵の背後の鵯越から急襲をかけ、平家の大軍を壊滅させる(巻九)。しかしその武功で検非違使・左衞門尉に任じられたことから、兄頼朝の怒りを買うことになってしまう。しばしの軍務離脱後、屋島攻撃の命を受けて戦線に復帰。梶原景時の逆櫓の主張を退け、暴風の中をわずか5艘で阿波に攻め寄せ、得意の奇襲攻撃で平家を敗走させた。続く壇ノ浦でも、不慣れな水軍を指揮して平家軍を追いつめ全滅させる。この時は平家方の勇将・教経に追われて隣の舟に飛び移るなどの早業も見せている。

『義経記』は源平合戦前の前半生と都落ち以後の後半生が詳しく語られ、優美な貴公子であり武芸に優れた青年として描かれていたが、『平家物語』では勇猛果敢ないくさ上手な武将としての側面が強調されている。また一方で、義経が自分の弱弓を知られることを恥じて落とした弓を敵の手に渡すまいとしたり、自分の身代わりとなって倒れた佐藤継信の死を深く悲しむなど、人間味あふれる一面も見せる(巻十一)。『平家物語』における義経は、合戦場面における武将として理想化されているといえるだろう。(大)

# ○能「八島」(観世流の表記は「屋島」)(展示 34)

二番目物、五流(観世・宝生・金春・金剛・喜多)現行、世阿弥作か

前シテ…老漁夫 後シテ…源義経の霊 ツレ…漁夫 ワキ…旅僧 アイ…屋島の浦人 [梗概] 西国行脚の旅僧が、屋島の浦で老人と若者の二人の漁夫に出会い、その塩屋に泊めてもらう。老人は僧に求められて、源平の屋島合戦の模様を語る。それは、ひときわ目立った義経の雄姿、悪七兵衛景清と三保谷四郎の錣(しころ)引きの力競べ、主人をかばって敵の矢を受けて死んだ佐藤継信と菊王の話であった。語り終えた老人は、自分が義経であるかのようにほのめかして消え失せる。〔中入〕夜半過ぎに義経の霊が甲冑姿で現れ、屋島の戦のさまを物語る。義経は戦いの最中に流してしまった弓を、弱弓であることを敵に知られないために危険を冒して取り返したという。そのうちに修羅道の責め苦の時が至り、義経は能登守教経を相手に激戦のていを見せるが、夜明けとともに姿は消え去る。

『平家物語』などに取材した大作の修羅物で世阿弥時代から存在しており(古称「よしつね」)、現代に至るまでの人気曲。江戸時代には「箙」「田村」とともに「勝修羅」と呼ばれた。現行曲では、義経の登場するのは「鞍馬天狗」「橋弁慶」「烏帽子折」「八島」「正尊」「船弁慶」「忠信」「安宅」「接待」の9曲でいずれもツレないし子方の役で、シテとしての義経しかも亡霊として登場するのは「八島」のみである。

前場は錣引き、後場は弓流しと、シテによって語られるまとまった軍話(いくさがたり)を中心にすえた構成となっている。ちなみに、屋島合戦を本曲では「元暦元年(1184)」とするが、史実では元暦二年(1185) 二月のこととする。

小書「那須」は、那須与一が扇の的を射る話をアイが仕方話にするもので、狂言方の重い習となっている。 「弓流」の時は後シテの弓流しの話の件りに、常にはない囃子事が入り、弓を取り落とす所作を見せる。(大)

# ○その他の能 「熊手判官」「二度聽」「楊若」「桜間」「遠矢」

源平合戦に取材した能は多種多様で数も多いが、義経が主役となる能は前掲の「八島」とその改作ともいえる「熊手判官」(展示 35)と、「関原与一」(展示 20)のみである。その他の作品では、義経はツレもしくはワキとして登場しており、勇ましい武将としての活躍ぶりは見られない。

# 能「鵜若」(展示 32)

四番目物、番外曲、作者未詳

シテ…佐藤継信 ツレ…佐藤忠信 ツレ…郎等 ツレ…源義経 子方…鶴若

〔梗概〕佐藤継信は、義経に従って奥州を出る時、幼子の鶴若を後に残して出発した。鶴若は父と共に戦に出ることを願い、狭布の里まで追ってくる。しかし継信は、病床の継信の妻が鶴若を止めようとする手紙を読み、鶴若を諭して故郷へ帰らせる。

# 能「二度懸」(展示 33)

四番目物、番外曲、作者未詳

前シテ…鷲尾の父 ツレ…源義経 子方…鷲尾 後シテ…梶原景時

〔梗概〕一ノ谷の合戦で、義経は鵯越で猟師の子に名を与えて家来とし、案内をさせて逆落としで平家を急襲する。一方、生田森合戦では、梶原景時は二度懸けをして子息の梶原景季とともに活躍をする。

前半・後半ともに一ノ谷合戦の先懸けの話で、古称「一谷先陣」のほうが内容にはふさわしいか。前半は 義経の鵯越での先陣、後半は生田森合戦で梶原景時・景季親子の先懸けを描く。後世の伝本は、前半を省略 し後半のみ(別名「梶原座論」・「座敷論」)のものが多い。永享元年(1429)五月三日に室町殿御所笠懸馬場 において多武峰様猿楽で所演されている(『建内記』『満済准后日記』)。

# 能「熊手判官」(展示 35)

二番目物、番外曲、作者未詳

前シテ…老漁夫 後シテ…源義経の霊 ツレ…平教盛の霊 前ツレ…義経郎等の亡霊 ワキ…旅僧 アイ…屋島の浦人

〔梗概〕西国行脚の旅僧が、屋島で義経の亡霊に会い、義経から、継信の最期の様子と、弓を流した義経が 平家方の熊手にかけられそうになりながらも必死で弓を取り返すさまを聞かされる。

前半は「八島」と同一で後半のみを書き換えた作品。「八島」に比べると屋島合戦のいくさ語りのみをシンプルに語る小品で、前段を省略して半能になっている伝本が多い。『言継卿記』に天文二十三年(1554)十月の上演記録がある。

## 能「桜間」(展示36)

四番目物、番外曲、作者未詳

シテ…桜間の介義遠 ツレ…郎等 ワキ…源義経 ワキツレ…信夫次郎 ワキツレ…郎等 〔梗概〕阿波国勝浦に着いた義経が、桜間の館を襲い、桜間を討ってから屋島に向かう。(大)

能「遠矢」(展示37)

四番目物、番外曲、作者未詳

シテ…浅利与市 ツレ…源義経 ツレ…井ノ木四郎近清

〔梗概〕 壇ノ浦の戦で、平家方の強弓を引く井ノ木四郎が、義経の船に十四東三つぶせの矢を射るが、浅利 与市は十五束の矢で射返し、井ノ木を射殺す。

(以上:大)

# ○舞「八島」(展示 38)

幸若舞、室町時代、判官物

〔梗概〕山伏姿で平泉に下向する判官一行は、信夫の里に着き、丸山の麓の家に宿を借りる。応対の尼公は、弁慶の再三の頼みを入れて山伏接待をするついでに判官一行の行方を尋ねる。尼公は佐藤継信・忠信の母だと名乗り、義経に従って出て行った子を失った親の悲しみを訴える。義経は弁慶に兄弟の最期を語らせる。主君の身替わりとなった子の最期を聞いて新たな涙にくれる尼公の姿に、義経は名を隠す罪を感じて名乗る。尼公は嘆きの中の喜び、と歓待する。

内容は尼公の山伏接待に、継信最期の屋島軍語りが合体したもので、能「接待」(57)と作品構造が類似している。また、江戸期から奥羽で語り継がれてきた奥浄瑠璃の「尼公物語」が同一の内容を持つ。この原拠については「尼公物語」と名付けられるような佐藤継信・忠信兄弟の鎮魂の語りがあり、これが能や幸若舞の素材源となったとする説が有力である。(『義経記』との関連は、本曲の場合は認められない。) さらに、浄瑠璃「やしま」「門出屋島」(展示 40)への影響関係も無視できない。

中心となるのは『平家物語』巻十一「継信最期」に基づいた屋島のいくさ語り(いわゆる「八島語り」)で、主君と主君の身替わりとなった家臣の母親との体面という劇的局面を設定しており、『義経記』の筋立て(巻七「判官平泉へ御着きの事」・巻八「継信兄弟御弔ひの事」。「八島語り」を含まない)とは大きく異なる。むしろ舞の構想は、宮増作とされる能「摂待」(展示 57)との関係が注目される。ただし能「摂待」では、「佐藤の館において山伏摂待」という高札をみて通り過ぎることができず立ち寄るという設定になっている。(大)

# 〇古浄瑠璃『義経記 三之巻』(展示 39)

土佐少掾の古浄瑠璃『義経記 三之巻』では、奥州秀衡のもとを出立した義経が、途中の出羽国で佐藤庄司の息子継信・忠信兄弟を家来にし、駿河国浮島か原で兄頼朝と対面するまで(初段)、平家追討の大将軍として西国へ向かい渡辺福島から阿波国へと渡るまで(二段)、八島で平家との戦いが始まり、教経の射た弓を義経の馬前に出た継信が受けて落馬するまでと錣引きの様子まで(三段)、八島での継信の死から壇浦での平家一門の入水、義経の八艘飛び、教経の死まで(四段)、梶原の讒言から腰越で頼朝に義経が出した腰越状のことと土佐坊が上洛して堀川御所へ弁慶に引き立てられて来るまで(五段)、義経の前で土佐坊が起請文を書くところから土佐坊による堀川御所夜討とその死まで(六段)が語られる。志水文庫蔵の『義経記 三之巻』(展示39)は、一丁裏が欠けており、その後の挿絵も見開き二図が削られた本である。末尾には奥書と鱗形屋の刊記がある。展示しているのは、浮島が原での頼朝と義経の対面の場面である。

# ○『門出八島』(展示 40)

『門出八島』(展示 40)は、近松門左衛門作の浄瑠璃『津戸三郎』(元禄二年五月竹本座初演)の改題本で、山本角太夫の正本である。『津戸三郎』の五段目を一部改変し「津戸三郎」を「志田三郎」に変えている。奥州を出立した義経が志田三郎の引き合わせにより佐藤次信忠信兄弟を家臣とするまでの物語が初段、二段目三段目は八島での合戦で、安西弾正と佐藤兄弟の確執や教経の矢を受けた次信の死と人々の愁嘆が語られる。四段目は、次信の妻のはや姫が、次信出立後に生まれた次若を連れて八島へ下って次信と対面し八島での合戦の様を聞くが、それは実は次信の幽霊であり次若が抱きついていたのは次信の鎧であったという御伽草子「小敦盛」に似た展開が語られる。五段目は新黒谷での次信追善の法要の場で起こる奇瑞が語られる。佐藤兄弟、特に八島の合戦で義経を守って戦死した次信(継信)とその妻子に焦点を当てた物語である。(川)

# ○浄瑠璃『一谷嫩草記』(展示 41)

『一谷嫩軍記』(展示 41)は、宝暦元年 (1751) 十二月豊竹座初演の浄瑠璃である。立作者である並木宗輔が三段目まで執筆して宝暦元年九月に死去、他の合作者たちによって完成した浄瑠璃である。二段目と三段目に熊谷次郎直実と平敦盛の物語が、二段目と四段目に岡部六弥太と平忠度の物語が展開し、初段と五段目で二つの物語を一つに纏めあげている。二つの物語の要となるのが、熊谷には暗に敦盛を助けるように、六弥太には忠度の和歌が『千載集』に入集することを伝えるようにと命じる源義経の存在である。平家を裏切った平時忠の野望を知っていながら娘卿の君を妻として油断させ、五段目で時忠が隠し持つ十塚の剣を奪い取る義経。敦盛が実は後白河院の落胤であることを知っていて、それを助けるようにと命じる義経。平重盛の死後その娘を盛り育てるために石屋弥陀六と名を変えて須磨に住む弥平兵衛宗清をそれと見破る義経。『一谷嫩軍記』の義経は、過去・現在・未来を見通す知将として描かれている。(川)

#### L 【頼朝との不和】

源平の合戦では華々しい活躍をした義経であるが、合戦の後間もなく、兄頼朝との不和が原因で都を追われる身となり、庇護を求めて逃げ込んだ奥州で秀衡の子どもたちに攻められて自害することになる。史実においては、頼朝との不和の理由や「腰越状」の真偽など様々な論があるが、『義経記』巻第四「義経平家の討手に上り給ふ事」では、頼朝と義経が不和になっていく過程が次のように記される。源平の合戦が終わり、義経は後白河院から検非違使五位尉の位をもらい、生け捕りにした平宗盛と共に鎌倉入りする。ところが、腰越(鎌倉市の東部)まで来た所で、頼朝から鎌倉へ入ることを禁止される。これは、合戦の折の意趣による梶原平三景時の讒言によるものであった。義経は頼朝に対して叛意はないことを記した申状(腰越状)を認めるが、梶原の再度の讒言もあり許されないまま都へ戻る。『義経記』では、梶原の讒言は、八島へ向かう折の逆櫓の争論や壇ノ浦での先駆けの争いを遺恨に思ってのことであろうと大名小名が噂したと書かれている。(川)

#### ○腰越状(展示 43)

義経が腰越状を書いたのは、腰越の万福寺という寺であったという伝承が残る。腰越状の宛名は大江広元、年時は元暦二年(1185)五月、『吾妻鑑』にもその全文が載っている。近世には、子どもの学問所として寺子屋とよばれる私的施設が設けられていた。そこでは、読み書きの手本として使われたのが、往来物と呼ばれる手紙の文例集であった。様々な往来物が版本の形で流布していく。その中に「古状揃」と呼ばれるものがある。古状や擬古状を集成したもので、慶安二年(1649)には大坂の本屋から刊行されている。「古状揃」は本によっておさめられている書状に異同があるが、「今川状」と並んで「腰越状」はほぼ必ず入っている。その他、義経に関わるものでは「弁慶状」「義経含状」(展示 62) などもある。(川)

# ○浄瑠璃『義経腰越状』(展示 42)

『義経腰越状』(展示 42) は、宝暦四年 (1754) 七月豊竹座初演の浄瑠璃である。この浄瑠璃の成立過程は少し複雑である。まず、享保四年正月に豊竹座で紀海音作の浄瑠璃『義経新高館』が上演される。「新」高館とあるのは、義経の高館での最期に大坂城落城を仮託しているからという。即ち源義経→豊臣秀頼、兼房→片桐且元、泉三郎→真田幸村、亀井六郎→木村重成、片岡八郎→後藤基次という設定で、物語が綴られているのである。(\*江戸時代には、同時代に起きた出来事をそのまま浄瑠璃や歌舞伎で上演することは禁止されていたため、こうした仮託はよく行われていた。)この『義経新高館』を元に作られたのが享保二十年(1735) 二月豊竹座初演の浄瑠璃『南蛮鉄後藤目貫』(並木宗輔作)であった。これは、表現があまりに大胆であったため正本が刊行されていない。『南蛮鉄後藤目貫』を再び義経の時代の物語に書き改めて延享元年(1744) 三月に江戸肥前座で上演されたのが『義経新含状』であった。この『義経新含状』をさらに改作したのが『義経腰越状』である。

さて、『義経腰越状』に登場する義経は、佞臣を側に置き、酒に溺れる人物として描かれている。源平合戦以後の義経を描いた浄瑠璃では、義経が主人公となることはなく、主人公として活躍するのは彼の周囲の人物(弁慶、忠信、静など)である。そして、少なからぬ浄瑠璃が義経を色を好む武将として描いている。加賀掾の古浄瑠璃『静法楽の舞』では、「され共義経色好みの曲者にて。平大納言の御娘を一条今出川に隠しおき深く忍ばせ給ひしが。またさんぬる神泉苑の舞楽の後。静を堀川に召をきて。昼はひねもす夜もすがら酒宴にあかし暮さる、」とある。同じく『凱陣八島』でも初段では久我大臣の娘を見そめて館へ連れ帰り、四段目では秀衡の娘の千種の前を見そめて忍んでいく。牛若時代の伝説でも、皆鶴・牛王姫・朝日天女・浄瑠璃姫と女性との物語が多かったことが思い起こされる。(川)

# M 【正尊・静との物語】

正尊(昌俊・正俊・昌春・昌尊とも)は、頼朝と義経の対立激化の中、義経に謀反の心ありと見た頼朝の密命を受けて文治元年(1185)九月二十九日に上洛、翌日義経襲撃を決行する。しかし、襲撃を事前に察した義経に迎え撃ちされ、鞍馬の奥・僧正が谷に逃走したが、鞍馬寺法師に捕らえられた。義経は昌俊が主君の命を重んじたことに免じて助命しようとするが、昌俊は拒否し、六条河原で斬られた。(『平家物語』巻十二「土佐坊被斬」、その潔い最期は「褒めぬ人こそなかりけれ」と称賛されている。)この義経邸襲撃事件は諸記録に見えている(鎌倉方の史書『吾妻鏡』、九条兼実の日記『玉葉』)。

昌俊の名は『平家物語』巻十「藤戸」で範頼軍の中に見えるが、読み本系諸本に各種の挿話が見える。昌俊の素性は異伝が多く、『吾妻鏡』には三条弥六家季を弟とし(文治元年 10 月 9 日条)、義経襲撃下命の際、下野国に住む老母と子に対する庇護を願い出て、頼朝から下野国中泉庄を与えられたとある。『平家物語』八坂本(二類・四類・五類)の巻十二や、幸若舞「堀川夜討」などは、『平治物語』に登場する金王丸の後進とする。また『義経記』巻四は彼を「二階堂の土佐坊」と呼ぶ。

静御前は義経の妾。母は磯禅師という舞手で、藤原通憲(信西)から男舞の指導を受ける。静はその芸を継いだ白拍子である。幸若舞「静」では、父を伏見中将という藤原氏の公卿とする。『平家物語』には巻十二「土佐坊被斬(きられ)」で義経が「最愛せられけ」る女として登場する。静は、周囲の様子がおかしいと正尊の動静を探らせ、それが義経を救うことになる。

静は都落ちにも同道するが、吉野で別れた後、捕まって鎌倉へ護送されることになる (→○)。

『義経記』は『平家物語』と話の展開は同様ながら、義経と静の描写はより詳しい。家来は各々宿所へ帰り、「判官は一日の酒盛に酔ひ給ひて、前後も知らず臥し給ふ」ていたが、その頃判官が側に置いていた「静といふ遊者」はしっかり者で機転が利き、正尊の元を偵察させる。不安が的中して夜半に邸を襲撃され、宿所に居た下仕えの喜三太が抗戦するなか、静は「夜更くる迄酒盛し給ひて、東西も知らずぞ臥し給ひける」義経に急いで身支度をさせる。後れて弁慶が駆けつけ、敗れた正尊は逃亡するも、結局捕らえられてしまう。

舞の「堀川夜討」ではこの様子がさらに変容する。義経邸急襲の際、油断していた義経は酔って眠っていたが、警戒していた静一人は眠っていなかった。予想通りの夜討に、静は「さればこそ」と、熟睡している義経を起こす。弁慶をはじめ家来たちも帰宅して誰も居合わせなかったため、武装した静が義経に続く。それはさながら義仲に付き従う巴御前のごとくである。(この後、伊勢三郎吉盛が駆けつけ、さらに、胸騒ぎを感じて様子を見にきた弁慶も参戦する。)

静も、続いて出でにけり。義経、ご覧じて、「左道なり、静御前。忍べ/\」と仰せけれども、耳にも更に聞き入れず、真先にこそ進みけれ。進む姿をご覧ずれば、萌黄匂の腹巻を、衣の下にぞ着たりける。 義経の秘蔵の白柄の長刀、弓手の脇に掻ひ込ふで、丈なる髪をばつと乱れば、黒母衣やらんと、見えたりけり。

『義経記』が堀川の攻防戦に焦点をあて、活躍する人名も多いのに対し、舞では登場人物を義経・土佐坊のほかは義盛・弁慶・静に限定して、五条の宿での正尊とのやりとりに劇的な面白さを盛り込む。義経を助けて活躍する女武者さながらの静の造型も特徴がある。能「正尊」では正尊と対決するのは弁慶であり、二人の対決が大きな山場となるのが特徴。「安宅」などと同様、弁慶に焦点が当てられるのである。静は義経の身支度をさせるが、戦うことはない。その意味では、舞「堀川夜討」とは異なる展開のしかたとも言えるだろう。(大)

# ○能「正尊(しょうぞん)」解説(展示 44)

四番目物、五流(観世·宝生·金春·金剛·喜多)現行、観世長俊作

前シテ…土佐坊正尊(\*金春・金剛流は前ツレ)

後シテ…土佐坊正尊(\*金春・金剛流は後ツレ)

子方…静御前 ツレ…源義経 ツレ…義経の郎党

後ツレ…姉和の光景 後ツレ(立衆)…正尊の郎党

ワキ…武蔵坊弁慶 (\*金春・金剛流はシテ)

オモアイ…義経館の下女 アドアイ…正尊の下人

[梗概] 都堀川の邸で謹慎中の義経を討つべく、鎌倉から土佐坊正尊がやってくる。弁慶は正尊を堀川の邸に連行し、上京理由を詰問するが、正尊は熊野参詣のためと言い張り、起請文を書いて読み上げるので、義経は偽りと知りつつ起請文を褒め、酒宴をもうけて静に舞を舞わせ、もてなして返す。[中入] 正尊の討ち入りを察した弁慶が武装して待つところに、正尊が郎等を従えて攻め寄せ、両者は激しく戦うが、寄せ手はみな討たれ、正尊も生け捕られる。

『平家物語』巻十二や『源平盛衰記』『義経記』、舞などに見られる昌俊(正尊)の訪問、起請文、夜討ちを題材とした現在物。劇的な構成と迫力をもつ。前場は会話を中心に、正尊の弁舌と文才を描く。舞「堀河夜討」とも同材だが、前後関係は未詳。特に〈起請文〉は「安宅」の〈勧進帳〉、「木曾」の〈願書〉とともに「三読物」と言われ重視されている。正尊と弁慶の腹芸で見せる対立が緊迫感をもつ。後場は、「斬組」を中心に前場と対照的な動きをみせる。なお、観世・宝生・喜多流では正尊がシテで起請文を読み、弁慶はワキとなる(起請文をどちらが読むかで決めており、脚本上の決定ではない)。金春・金剛流では弁慶がシテで、ツレの正尊が書いた起請文を渡されて読む。観世流では「起請文」の小書付きで他流と同様になるので、常にこの小書つきで上演される。(大)

# ○浄瑠璃『御所桜堀川夜討』(展示 45)

源平合戦以後の義経の流浪を描いた浄瑠璃は少なからずあるが、義経の堀川御所が出てくる浄瑠璃には、『右大将鎌倉実記』(享保九年(1724)竹本座)『清和源氏十五段』(享保十二年(1727)豊竹座)『義経千本桜』(延享四年(1747)竹本座)などがある。其中で、題名に「堀川御所」を冠する『御所桜堀川夜討』は、元文二年(1737)正月竹本座初演、文耕堂と三好松洛合作の浄瑠璃である。

頼朝の命を受けて上京し、義経の堀川御所を夜討ちするのは、土佐坊正尊であるというのが、『義経記』や能「正尊」舞での定説である。ところが、『御所桜堀川夜討』(展示 45)では、義経を討つために上洛するのは梶原景高で、土佐坊昌俊は、義経を助けるために討手を申し出て梶原と共に上洛するという設定になっている。さらに、第五段で堀川に夜討ちを仕掛けて殺されるのは、土佐坊の名を偽った梶原の家来の番場忠太であったと変えられている。土佐坊には、幼名を金王丸といい義経の父義朝の最期まで付き従った家来であるという伝説があり、いくつかの浄瑠璃ではこれを取り入れている。例えば展示している資料では、『烏帽子折』(展示 7・22)で、烏帽子屋にいる牛若を長田庄司が攻めてくる時に、助けに入るのが土佐坊であった。彼の言葉に「是長田某は法体し土佐坊昌俊となのれ共。金王丸といつし時うぬめをもらせし無念さに。其時の姿を残し四十に成迄此前髪。今こそ落とせ是見よと。付髪鬘取しより土佐坊とこそ成にけれ。」『御所桜堀川夜討』(展示 45)で、土佐坊を頼朝と義経を和解させるために尽力する善者とする設定はこうした伝説とそれを取り入れた古浄瑠璃・浄瑠璃の影響を受けてのことと思われる。(川)

## N 【都落:平家の怨霊の物語】

平家の怨霊譚は、琵琶法師「耳なし芳一」の話(小泉八雲『怪談』)や甲羅に人面の模様がある「平家蟹」など巷に多いが、義経伝説のなかでは、幸若舞や能の中でしばしば、都落ちをする義経の前に平家の怨霊が現れる。義経は、頼朝からの攻撃を避けて西国に落ちるが、大物浦で嵐に遭い、芦屋住吉浦に打ち上げられた。この大物の浦の遭難は、『平家物語』(巻十二「判官都落」)、『源平盛衰記』(巻四十六「義経・行家出都」)では簡略に記すのみだが、『義経記』(巻四「義経都落の事」)では、運命を狂わせた大きな要因として扱う。そしてそこには平家の怨霊が登場する。遭難の原因となった暴風について、『平家物語』では「忽ちに西の風吹きける事も平家の怨霊の故とぞ覚えける」と推測するが、舞「四国落」では、「平家の悪霊たち、その数湧出せられけれども」弁慶の加持祈祷で治まり海底に入っていったと語る。

『義経記』巻四「義経都落の事」「住吉大物二ヶ所合戦の事」は、舞「四国落」とは比較にならぬほど敷衍化が甚だしい。弁慶は嵐の様子を見ながら、「源氏の大将軍においては我等悪霊、死霊とならん」という平家の武将が遺した言葉を思い出し、暴風が平家の怨霊の仕業と断言し、警戒の言葉を発する。この発想の先には、能「船弁慶」の後場、平家の亡霊達による嵐がある。(「船弁慶」も同材だが、先後関係は不明。)「船弁慶」では、嵐の主たる原因を知盛の霊とする。

また、時と場所が変わるが、後の奥州下りの途次、直江の津での出来事として、こうした怨霊出現のさま を最も詳しく語るのは、舞「笈捜(おいさがし)」で、以下のように綴る。

今迄は、ありとも覚えぬ船どもが、その数あまたほの見えたり。「あれは助け船か、嬉しや」と仰せられけるところに、さはなくして、赤旗差し上げたる武者どもが、いかほども多く沸きででたり。不思議に思し召すところに、船の内に声ありて、「宗盛父子、これにあり。東国の九郎冠者、恋しや」と呼ばはり、

近づくと見ゆる。能登守教経は、小船一艘に、舵取召し具し、近づくと見ゆる。二位殿と覚しき尼公、 先帝を抱き申し、ただいま海底に身を沈めんとて、義経のほうを恨めしげに見て立たせ給ふ。

多くの幽霊船に武者、そして宗盛父子、教経、二位の尼と先帝まで姿を見せるが、弁慶の引導で成仏する。 ここでは他作品と異なり、成仏・感謝まで述べられるのが特徴である。

ただいま申す弁慶が引導につき、法心の一理を悟って、輪廻の絆を離れて、妙覚無為の位についたる事の嬉しさよ。昔は敵、今は導師となり給ふ。暇申して、さらばとて、波の底に入り給へば、風も波も鎮まって、船は小波に揺りすゆる。

舞「笈捜」は大物浦とは場所・時を異にするが、いずれにしても、義経流離の旅に待ち受ける数々の障碍を、 弁慶の超人的活躍ぶりで突破する様子を語るという点は共通していると言えよう。(大)

# ○能「芦屋弁慶」(別称「四国落」)(展示 46)

四番目物、番外曲、作者未詳

シテ…武蔵坊弁慶 ツレ…老翁 子方…源義経 ワキ…芦屋三郎光重 ワキツレ…従者 アイ…舟子 (異本:前シテ…住吉明神、後シテ…芦屋三郎光重、ワキ…弁慶、子方…源義経 トモ…従者)

[梗概] 義経一行が尼崎大物の浦から船出をしようとするが、嵐に遭って見知らぬ浜辺に打ち寄せられる。 弁慶が通りがかりの老翁に当地について尋ねると、「漁り火の藻塩を煙風に消えて吹き明かしたる荻のひと むら」と和歌で教え、住吉明神と名乗って消える。(\*萩(浜荻)とは芦のことで、歌には芦屋の浜の情景 が詠まれている。)そこへ当地の国司の芦屋三郎光重が大軍で襲来するが、弁慶は光重との激しい一騎打ち を制し、勝ちどきをあげる。幸若舞の「四国落」を謡曲化したもの。前場は大物浦の遭難、後場は芦屋住吉 の浦での合戦の様子を描く。

#### ○能「船弁慶」(展示 47)

五番目物、五流(観世·宝生·金春·金剛·喜多)現行、観世信光作

前シテ…静御前 後シテ…平知盛の霊 子方…源義経

ワキ…武蔵坊弁慶 ワキツレ…従者 アイ…船頭

[梗概] 源義経は、兄頼朝との不和から都落ちをするはめになり、武蔵坊弁慶ら少人数を連れて西国に向かう。途中、摂津の大物浦の船宿で、後を慕ってきた静御前をさとし、都へ帰らせることにする。静は義経の前途の幸を祈って舞を舞い、涙ながらに立ち去る。[中入] 海上に出てしばらくすると、にわかに暴風になり、船頭の努力もむなしく船が波にもまれるうちに、平家の怨霊が沖に浮かび出る。なかでも知盛の怨霊は薙刀をふるって襲いかかってくるが、弁慶の祈りの力に負けて退散する。

義経は子方が演じ、静との別れに涙する心優しい主君である。対する弁慶は、知恵を絞り、危機を乗り越える。この構図は先の舞「笈捜」や能「安宅」(展示 53) などにも見られるもので、義経の悲劇的な後半生の描かれかたに共通する。

シテには静御前の優美な舞と、知盛の激しい動きを同じ演者に演じ分けさせる。場面転換の鮮やかさ、囃子の描写音楽的な用法、ワキやアイの活躍など、信光の作風が集約されている人気曲。作り物の舟は、知盛の怨霊の世界と義経一行との境界を明確にする役割を果たしてもいる。(大)

#### ○『義経千本桜』(展示 48)の世界

延享四年 (1747) 竹本座初演の浄瑠璃『義経千本桜』(展示 48) は、『菅原伝授手習鑑』『仮名手本忠臣蔵』と並び三大名作とも称される浄瑠璃で、他の二作と共に文楽や歌舞伎での上演回数が非常に多い作品である。この浄瑠璃も「義経」と題名にはあるが、物語の主人公は義経ではなく源平の合戦で亡くなったはずの平家の武将知盛・教経・維盛や義経の家来の佐藤忠信に化けた源九郎狐などである。義経は全てを見通し、複数の物語の要となる立場として描かれている。義経が登場するのは、初段の堀川御所の場と二段目の大物浦の場と四段目の吉野山川連法眼館の場である。初段は、Mの堀川夜討の物語に該当し、二段目の大物浦の場に「船弁慶」を下敷きにした物語である。壇浦で入水したはずの平知盛は、大物浦の船宿渡海屋の主人銀平と名乗り、典侍局とともに安徳天皇を守りつつ身を隠している。義経主従は、堀川御所を出た後、九州へと落ち延びるために大物浦まで下り、この渡海屋に滞在している。知盛は義経を海上で討とうと謀るが、すべてを承知していた義経たちによって計画は挫折、義経が安徳天皇を保護することを約束すると、典侍局は自害し、知盛は碇を担ぎ海へと沈む。前半は渡海屋銀平として登場した知盛がいったん退場した後、本来の平知盛の姿に戻って登場するとき、「これは桓武天皇九代の後胤平知盛の幽霊也」という能「船弁慶」の一節が語られる。その出で立ちも能のシテをイメージしたものとなっている。また知盛の最期の言葉の一節は「大物の沖にて判官に。怨をなせしは知盛が怨霊なりと伝へよや」であり、その伝えられた物語が能「船弁慶」であるという風に能へとリンクしているのである。(川)

# 〇 【都落:吉野山での物語】

西国落ちに失敗した義経一行は、しばらくは大和国宇陀に潜伏していたが、厳しい追手の追求を逃れるために吉野山中に身を隠すことになった。雪の吉野を舞台にしたこの逃避行の様子は、『義経記』巻五で語られる。内容的には、雪中に捨てられる静の悲話と、義経の身代わりとなって奮戦する佐藤忠信の活躍、そして義経一行の脱出譚の三つである。

静と義経の訣別場面は『義経記』の中でも特に叙情性が強いが、悲嘆にくれる義経の姿はこれまでの武将らしさとは対照的で、『義経記』ではこのあたりから義経像の貴公子化が始まる。そして、それと反比例するように郎等達の活躍が次第に全面に出てくる。佐藤忠信の奮戦やこれに続く弁慶の活躍はその現れといえるだろう。ことに忠信の英雄的な戦いを描いた「忠信吉野山の合戦の事」は、巻四の堀河夜討(「土佐坊義経の討手に上る事」)の話とともに本書の合戦描写の白眉とされる。

続く義経主従の逃走譚は弁慶の独り舞台で、寺衆たちの執拗な追跡を才知と機転で巧みに振り切るその働きが、やや諧謔を交えた筆致で面白く語られ、心温まる逸話も合わせ、没落の悲運の中で主従のきずなが堅くむすばれるさまも強調されている。

住吉・大物での合戦の後、義経はそれまで行動をともにしていた女性達を都や親元へ返す(『義経記』巻四「住吉大物二ヶ所合戦の事」末)。しかし静のことは「なほも志深くや思はれけん」、義経は静を同行して大物浦を立った。吉野山に潜伏するも、吉野山の僧たちが連日野山を捜索しており、一行は身動きがとれない。足手まといになる女性を連れて行くべきではないとの弁慶の進言によって、義経はようやく静を都へ返す決心をする。義経は静に多くの金銀や秘蔵の鼓「初音」などを与え、供の者たちを付け、静を都へ送るように命じた。義経たちが山伏姿になって逐電したのち、供の者たちは静の財宝を奪い、静を金峰山の雪中に置き去りにしてしまう。静は道に迷い、さまよい歩いた末に蔵王堂にたどり着き、執行に助けられた。その後、静は京都守護職であった北条四郎時政の元に送られ、さらに文治二年(1186)三月一日、頼朝の命で母の磯禅師とともに鎌倉に送られ、彼の地で男子を産むことになった。

『義経記』巻六は吉野の後日談で、主君義経の身代わりとなって敵の目をくらまして逃亡した忠信はその後、都に潜入し忠死、首は鎌倉に送られる。辛うじて吉野を脱出して南都に潜伏した義経一行の様子、そして、捕えられ鎌倉に護送されて以降の静の様子が語られる。(大)

#### ○能「忠信」(展示 49)

四番目物、観世·宝生流現行、作者未詳

シテ…佐藤忠信 前ツレ…源義経 トモ…義経の従者 後ツレ…衆徒 ワキ…伊勢三郎 アイ…早打 [梗概] 兄の源頼朝に都を追われた義経は、吉野の衆徒を頼って山中に身を潜めていたが、衆徒変心の報告 を伊勢三郎から受け、佐藤忠信に防ぎ矢を命じて山を落ちのびる。[中入] やがて衆徒たちが押し寄せてくるが、忠信の防ぎ矢のために近づけない。機を見て忠信は切腹したと見せかけ、谷底づたいに逃れ、なお迫る追手を斬り散らして義経の後を追う。

義経に後を任された忠信の活躍を見せる作品。能の構成としては単純な斬組み物。観世・宝生二流のみの現行曲だが、両者では後半の構成が違い、宝生流では「斬組」の囃子事が入って戦闘場面が長くなる。(大)

# ○古浄瑠璃『義経記 四日目』(展示 50)、『義経記 四之巻』(展示 51) 解説

志水文庫には、古浄瑠璃『義経記』の四段目が二種類ある。この内、『義経記 四日目』(展示 50)は井上大和掾の正本、『義経記 四之巻』(展示 51)は土佐少掾の正本である。内容は、義経の都落ち大和掾正本は、末尾が欠丁であるが五段本のようである。一方、土佐少掾本は六段本である。版は異なるが、挿絵や本文は、土佐少掾本が大和掾本を利用している。四日目・四之巻双方に書かれている内容は、堀川夜討ちの後、義経が都落ちを決意し、九州へ下るために大物浦で船に乗るが、平家の怨霊に襲われて果たせず、吉野山へ入り、そこで静御前や佐藤忠信と別れるところまでの物語である。大和掾本には本文中に、土佐少掾本には題簽に各段の内容が書かれているのでそれを並べる。(川)

(大和)第一 判官都をち付平家の悪霊の事、第二 大物浦かつせんの事、第三 判官吉野山へをち同しづか捨らる、事、第四 吉野にてしづかほうらくの舞の事、第五 よしつねと忠信わかれの事 (土佐)第一 判官都おち平家おんりよう、第二 だいもつ浦かつせん、第三 よしつね四国おち、第四 判官吉野山えおち、第五 よしのにてしづかほうらくのまひ、第六よしつね忠信わかれ

#### ○浄瑠璃『吉野忠信』(展示 52) 解説

浄瑠璃『吉野忠信』(展示 52)は、元禄十年((1697)七月十六日竹本座上演(推定)の近松門左衛門作の 浄瑠璃である。尾張徳川家の家臣であった朝日文左衛門の日記『鸚鵡籠中記』元禄十年七月十八日条に、二 日前から始まったこ『吉野忠信』を見たという記事が載っている。

『吉野忠信』初段は、京都九条の廓の場面から始まる。時は堀川夜討ちの直後である。義経は九条の廓の傾城若紫に通い詰めている。佐藤忠信は、義経が若紫に逢えないようにと彼女を揚げ詰めにするが、義経の誤解を招き勘当されてしまう。第二段では、北条時政が梶原平次景早とともに義経を討つため都へ上る。堀川御所で戦いの準備をする義経の元に、時政が単身で現れて諫言し、義経は都を落ちることを決意する。

第三段は忠信と彼の忍び妻花紫と九条の傾城若紫(出家して貞順)が絡む物語である。『義経記』巻第六には「忠信他事な〈思ふ女一人四条室町にこしばの入道と申者の娘に、かやと申女なり」と都に忠信の恋人がいたことが書かれている。心変わりしたかやは吉野山から逃れて都に隠れ住む忠信を訴人してしまう。この女性をモデルにして設定された花紫は、『義経記』とは異なり、最後まで忠信に尽〈す女性として描かれている。第四段の舞台は吉野山である。吉野山で義経は、弁慶の諫めに従い静を都へ帰すことにする。山を彷徨う静を花紫と貞順が救う。吉野山の大衆が攻めて〈る中危機に瀕した義経を、後を追ってきた忠信が救う。第五段は吉野山中院谷が舞台である。押し寄せる大衆に対して、忠信は自分が義経の名を名乗り敵を防〈間に落ち延びるようにと義経に言う。義経は太刀と鎧を忠信に与えてその場を逃れる。忠信は義経と名乗って戦い、川ぐら法眼と横川の覚範を討ち取り落ちのびていく。『義経記』などにある義経と静御前の別れや吉野山での佐藤忠信の活躍をもとにしながら、廓の風俗や傾城の口説文、遊女名寄せなどを取り込んで近世的展開をみせた浄瑠璃である。(川)

# P 【都落:弁慶の活躍】

弁慶は、前述のように (→E) 歴史に記されたことは少ないが、『義経記』ではその誕生から義経との出会い、そして奥州衣川での壮烈な最期に至るまでの生涯の全貌が明らかにされている。熊野三山を司る別当の子であるとか、歯や髪が生え揃って生まれてきたとか、乱暴が過ぎて比叡山を追い出されたとかいった数々の逸話も、義経が英雄視されるにつれて、次第に造形されていったのかもしれない。

『義経記』とほぼ同時代の能や舞は「判官物」なる一類を形成しており、そのうち弁慶の活躍が中心となっているものに、能では「橋弁慶」「安宅」「摂待」「正尊」「船弁慶」があり、舞では「富樫」「笈捜」「四国落」「八島」「堀河」「高館」「腰越」がある。これらを受けて、浄瑠璃・歌舞伎では特に「安宅」「富樫」から「勧進帳」、また「橋弁慶」から五条橋での主従契約の場面が弁慶の見せ場として取り上げられることになった。弁慶という人物は、二様に描かれている。たとえば、御伽草子『弁慶物語』『橋弁慶』『自剃弁慶』などに登場するときは、怪力で乱暴者だが、無邪気で陽気、とぼけたおかしみのある、愛すべき狂騒の人物とされている。一方、能の「船弁慶」(展示 47) や「安宅」(展示 53)、歌舞伎「勧進帳」などにおいては、武力よりも知略を尽くす人物として描かれている。そこには乱暴者の面影はなく、肝が据わって機転も利く役柄となっている。その描かれ方はさまざまだが、義経が美しく悲劇的な貴公子であることを際立たせ、さらに庇護する役柄として、弁慶は欠かせない存在といえるだろう。(大)

## ○能「安宅」(展示 53)

四番目物、五流(観世・宝生・金春・金剛・喜多)現行、作者未詳(観世信光とも)シテ…武蔵坊弁慶 子方…源義経 ツレ(立衆)…随行の郎等 ワキ…富樫の某オモアイ…供の強力 アドアイ…富樫の下人

[梗概] 安宅の関守富樫は、源義経捕縛の命を受けて待ち構えていた。兄頼朝に追われている義経は、家来の弁慶たちと山伏に変装して奥州へ落ち延びる途中、この関にさしかかる。弁慶は、東大寺復興の寄付を募る山伏と偽り、持ち合わせの経巻を勧進帳と名付けて、寄付募集の趣旨を即座に案文しながら読み上げ、いったんは通過を許される。しかし、わざと重荷を背負っていた義経が見とがめられたので、弁慶は足弱なため疑われたのだとののしって、金剛杖で打ち据え、事なく通過する。危機を脱した一行は、山陰に憩い、義経の不運を嘆き合う。そこへ富樫が迫って来て、非礼をわびて酒を勧めるので、弁慶は杯を受けて舞を舞い、虎口を逃れる思いで道を急ぐ。

『義経記』や幸若舞「富樫」「笈捜」などと素材を一にし、悲運の英雄義経主従の所々での受難を一所に集約し、弁慶の知略と勇気と衷情を力強く描く。都から安宅までの長大な道行以下、いくつもの山場を巧みに配して、たたみかけていく脚色は非凡で見せ場が多い。「読物」と「男舞」が中心となる。

勧進帳の「読物」は、漢文体の散文を皷のリズムに乗せて謡いあげる特殊な形式で、観世信光より前の作者の作品には用いられていない。また「男舞」は、遊僧弁慶が往事の延年の舞の思い出に舞う趣向という。 判官物のなかでも最も劇的変化に富みむ。(大)

#### ○浄瑠璃の中での「安宅」(『凱陣八島』(展示 55)『鳴響安宅新関』(展示 56))

能の「安宅」をもとに、天保十一年(1840)上演されたのが歌舞伎の『勧進帳』である。その歌舞伎の『勧進帳』を改作して明治二十八年(1895)に人形浄瑠璃として上演されたのが『鳴響安宅新関』(展示 56)である。これら二作は一幕二場の能「安宅」にかなり忠実な物語であるが、これ以前にも浄瑠璃や歌舞伎には作中に能「安宅」を取り入れた作品が少なからずある。義経と無関係の作品ではあるが、近松門左衛門作の浄瑠璃『出世景清』(貞享二年(1685)竹本座初演)では、第一段東大寺大仏殿の場で、頼朝を付け狙う悪七兵衛景清を見とがめた本田次郎と大工の棟梁の問答に、能「安宅」の中の強力を義経と見て声を掛けた富樫と弁慶の問答が取り込まれている。義経に関わる物語では、当然ながら安宅の関の物語は何らかなの形で利用されている。『凱陣八島』(展示 55)は、貞享二年(1685) 大坂で宇治加賀掾が語った浄瑠璃で、作者は井原西鶴である。竹本義太夫が語った近松門左衛門作『出世景清』との競演で有名な浄瑠璃である。この二段目に能「安宅」が取り込まれている。特に弁慶が巻物を取り出して勧進帳と名付けて高らかに読み上げるところは、能「安宅」の本文がそのまま使われている。(川)

# Q【佐藤兄弟を供養する物語】

『義経記』巻第七は義経の北国落から始まる。途中、渡し守に見とがめられて弁慶が義経を打擲したり、関所で笈を探されたりと危機を乗り越えた義経一行は、亀割山で同行した義経の北の方が出産するという緊迫した出来事を経て、ようやく奥州平泉の藤原秀衡の館にたどり着く。『義経記』は巻第八で終わるが、その巻の冒頭に「継信兄弟御弔の事」がある。高館に落ち着いた義経は、度々兄弟の母に頼りを使わしているが、ある時、継信忠信兄弟の跡を弔うことにする。兄弟の母と兄弟の遺児たちが招かれた弔いの席で、義経は烏帽子親となって二人の遺児を元服させる。さらに二人に継信と忠信の最期の物語を語って聞かせる。

舞の「八島」も、この佐藤継信・忠信兄弟を義経が弔う物語が枠組みになっている。『義経記』とは異なり、奥州平泉に下向する途中で、偶然に佐藤兄弟の家に泊まった義経は、自分たちの名を名乗らずに(最後には名乗る)、弁慶に八島の合戦や吉野山での合戦の様子を語らせる。「八島」の題は、この弁慶による語りに由来する。平泉へ着く前に佐藤家に立ち寄るという設定は、能の「摂待」(展示 57)も同じであり、この設定は浄瑠璃にも受け継がれていく。古浄瑠璃『凱陣八島』(展示 58)では、第三段目が佐藤家の場面で、能「摂待」の本文がそのまま使われている。(川)

# ○能「摂待」(展示 57)

四番目物、観世・宝生・金剛・喜多流現行、宮増作か

シテ…老尼 子方…鶴若 ツレ…源義経

ツレ…義経の郎等 ワキ…武蔵坊弁慶 アイ…佐藤の下人

[梗概] 佐藤継信・忠信の母老尼は、山伏摂待の高札を打ち義経一行を待ちうけていた。そこにやってきた義経主従十二人は素知らぬ顔をして立ち寄るが、老尼は義経主従と悟って郎等の名を言い当て、継信の子の鶴若も義経を指し当てたので隠しきれず名を明かす。老尼は義経に継信の最期を聞きたいと願うので、義経は弁慶に、屋島の合戦で義経の身代わりとなった継信の最期を語らせる。義経も、継信が最期に故郷の老母と幼子に心を残していたと語り、自分の今の身の上を嘆く。老尼たちの心のこもった摂待を受けるうちに夜が明け、義経一行は出立となる。供を願った鶴若は弁慶になだめられ、老尼とともに見送るのだった。

『義経記』巻八「継信兄弟御弔の事」(\*「判官物語」系諸本はこの章がない)を素材とした作品で、前述のように(→K)舞「八島」(展示 34)と類似した構成。弁慶が語るいくさ物語は『平家物語』巻十一を典拠としている。老母の子への思い、鶴若の父への思い、継信の忠義、義経の恩情と、おのおのの思いを織り込んだなめらかな文章と劇的な脚色が優れている。舞台面は人数が多いが、動きが少ないこともあって混乱はなく、シテの老尼を中心に、子方の鶴若、義経、弁慶などの人物像がよく描き分けられている。見どころとなる舞事をもたない構成で、弁慶の「語り」が聞かせどころとなる。(大)

#### R 【義経の最期】

奥州へ逃れた義経は、幼年期と同様に再び藤原秀衡のもとに身を寄せる。しかし、ようやくたどりついた平泉も安住の地とはならなかった。頼みとする秀衡が十月二十九日に死去すると、「義経を中心に兄弟が団結して鎌倉から国を護るように」との遺言にも係わらず、子の泰衡は頼朝の脅迫に屈し変心し、義経を攻める。文治五年(1189)閏四月三十日、義経は衣川の館で31歳の波乱の生涯を閉じた。『義経記』巻八「衣川合戦の事」では、主従八騎で数百騎を迎え撃ったとする。家来達がみな討たれると弁慶は義経の元に戻ってきて報告をし、義経が自害をする時間を稼ぐために再び出て行く。弁慶は義経の楯となって、立ったまま最期を迎えた。弁慶死去までの義経郎等の奮戦の件りは、幸若舞「高館」となった。経を読み終えた義経は腹を切り、北の方も後を追う。兼房は子供たちの最期を看取り、館に火を放っち、火の中に飛び込み自害する(巻八「判官御自害の事」「兼房が最期の事」)。『義経記』は、遺言を違えた泰衡が、鎌倉方に義経討伐の報告をした直後に攻められ、奥州の藤原氏滅亡を語って巻を閉じる(巻八「秀衡が子供御追討の事」)。義経の首は泰衡によって鎌倉に送られた。変わり果てた義経の姿に、見る者がみな涙を流したと『吾妻鏡』は伝えている。

舞「含状」は『義経記』巻八の義経自害をめぐる件りとこの首実検とに材を得て作られた。義経の首が無 念の思いを記した状を口にくわえていたとする。(大)

#### 〇「義経含状」(展示 62)

近世の子どもの手習いの手本として刊行された「古状揃」の中に「含状 (義経含状)」と呼ばれる書状が入っている。義経の最期を描いた舞に「含状」という題の作品がある。高館で自害した義経の首は、鎌倉へ届けられる。首実検を行った畠山重忠が義経の首が口に状をくわえていることに気付き、高らかに読み上げる。中には、義経が産まれてから源平の合戦が終わるまでの出来事が書かれ、末尾に梶原の讒言により兄頼朝と不和になったこと、梶原の首を討って欲しいという願いが書かれていた。これが「古状揃」の中の「含状」の元になっている。(川)

#### ○舞「高館」とその周辺

本曲の主題は、義経主従の厚い情義と、喜んで主君に準じた郎等の話にあり、戦国乱世の時代思潮に迎えられて人気の高かった曲。素材は『義経記』巻ハ「鈴木三郎重家高館へ参る事」「衣川合戦の事」と同じだが登場人物や内容は異なる。構成も前半は合戦前夜の高館で、鈴木重家三郎を中心に展開し、弟に譲る重代

の腹巻の由来として熊野本地譚がある。後半は合戦の場で、鈴木·亀井兄弟と弁慶の奮戦及びその死で、特に、瀕死の重傷を負った弁慶が判官と若君に今生の別れを告げ、衣川で立往生をする場面など最も動的で劇的である。「弁慶の立往生」なる語の出所は本作品か。『義経記』との先後関係は不明だが、本作のほうが古態とされる。(大)

# ○能「髻(もとどり)判官」(「衣川」)(展示 59)

二番目物、番外曲、作者未詳

前シテ…里人 後シテ…源義経の霊 ワキ…旅僧

[梗概] 旅僧が、衣川のほとりにある松の木の下に髻が切り捨てられているのを見つけ、立ち寄ろうとする。そこへ里人が登場し、それは義経の髻でもし人がこれに近づけば太刀風という風が起こってその人を取ると語る。しかし自らの正体を明かし、あとを弔ってほしいと後刻を約して姿を消す。旅僧が通夜をしていると、夜更けに義経の霊が姿を現し、今もなお讒言をした梶原に対する恨みを語る。そこへ太刀風が起こり、修羅の苦を見せる。(大)

# ○能「義経」(展示 61)

四番目物、観世流新作能 (昭和十七年)、高浜虚子作

前シテ…里女 後シテ…義経の霊 ワキ…旅僧 アイ…所の者

[梗概] 湖北の地に国土建設の工事をする者が登場し、地形の工事に精を出すべき由を布告する。皇軍進駐の跡を廻る旅僧が登場し、まず大陸に渡って戦跡を訪れて国土建設の様子を見て感涙し、さらに奥地へ赴き湖北の地に着く。そこで餅売りの里女から、成吉思汗とは義経だという話を聞かされ、成吉思汗の廟に参詣する。[中入] 通夜をする僧の前に、唐冠に鎧姿の武将が現れ、鎌倉殿(頼朝)に容れられず当地に至り、諸国を統一したと、自らのことを語る。そして、今回の戦争にも馳せ参じると言うや否や姿は雲間に消えてしまう。

第二次世界大戦中に士気高揚を目的として作られた新作。昭和十七年(1942)二月八日にラジオ放送されたのが初演。作者は高浜虚子で、節付けは観世銕之丞が担当し演じた。前付けに「成吉思汗は源義経なり、との伝説に基づき、雄大なる構想をめぐらした二番目能」とする。時局を反映し、当時の皇国史観や大東亜共栄圏の思考などが導入されていて、現在このままの詞章では上演することはできない内容のもの。

「義経」と題する同名異曲はほかに2種ある。一つは「八島」の古名で、世阿弥が伝書『世子六十以後申楽談義』の中で使っている(「道盛・忠度・よし常、三番修羅がかりにはよき能也」)。もう一つの曲は義経の霊を主人公とする典型的な夢幻能で別名「高館」。シテは義経の霊で、高館を訪れたワキの旅僧に自らの最期を語り修羅の苦しみを見せるという内容のもので、伝本によって本文に若干異同がある。(大)

## ○死なない義経の物語

「判官贔屓」という言葉がある。「弱者や敗者に同情してひいきにする気持ち」と辞書には説明があるが、この言葉は、「判官」すなわち源義経の悲劇的な生涯に対する同情心から生まれたものである。この判官贔屓の気持ちが乗じてか、平泉の高館で義経は死ななかったという物語が生まれる。有名な話としては、ジンギスカンが実は中国大陸へ渡った義経であるという伝説が挙げられる。中国はともかくも、東北から北海道にかけては、義経が衣川から蝦夷地へと渡ったという伝説があちらこちらに残っている。能「野口判官」(展示 60)や最初に展示している『絵本義経嶋巡り』(展示 5)もそうした伝説をもとにしたものである。浄瑠璃では、近松門左衛門作の『源義経将棋経』(正徳元年(1711)正月二十一日以前竹本座上演)が、やはり義経が蝦夷へ逃れたという伝説をもとにしている。高館での合戦の時、弁慶と義経はその場を逃れる。衣川の奔流で義経は佐藤次信の幽霊に助けられる。千島にたどり着いた義経と弁慶の前に鞍馬山の大天狗大僧正坊が現れ、義経が高館を逃れたことに気付いて攻めてきた伊達次郎と錦戸四郎を追い払う。千島の大王となった義経は、僧正坊の起こした風に乗り、浄瑠璃姫や北の方が逃れている女護島へと渡り、長生殿と呼ばれる御殿に入る。(川)

#### ○能「野口判官」(展示 60)

二番目物、番外曲

前シテ…里人 後シテ…義経の霊 ツレ…大天狗・小天狗 ワキ…旅僧

[梗概] 奥州衣川からやってきた旅僧が播州野口の教信寺に立ち寄る。 里人が声をかけてきて、教信上人とは義経であるという話を聞かせて くれる。[中入] 義経の霊が登場し、旅僧に名乗り、高館で自害しよ うとしたところに鞍馬の大天狗がやってきて黒雲に乗せて播磨国野口 に連れてこられ、ここで僧となり教信上人と呼ばれたと語る。(大) 「みんなの偶像!牛若・義経 一芸能にみるその姿一」目録 (2019年9月24日~11月21日

> 神戸女子大学古典芸能研究センター 展示室)

2019年9月27日公開

編集 神戸女子大学古典芸能研究センター 展示企画 非常勤研究員 大山範子 川端咲子

図録作成 非常勤研究員 川端咲子 〒650-0004

神戸市中央区中山手通二丁目 23-1